群馬県近世寺社総合調査
報　告　書

― 歴史的建造物を中心に ―

《神 社 編》

令和４年３月

群　馬　県

口絵１　神社143　(桐生)天満宮　末社春日社　16世紀末期から17世紀初期

口絵２　神社69　辛科神社　本殿　寛文元年(1661)　彫刻は後補

口絵３　神社49　小祝神社　本殿　享保２年(1717)

口絵４　神社152　冠稲荷神社　本殿　享保７年(1722)　彫刻は後補

口絵５　神社158　(世良田)八坂神社　本殿　宝暦６年(1756)

口絵６　神社52　(八幡)八幡宮　本殿　宝暦７年(1757)

口絵７　神社112　(川額)八幡宮　本殿　宝暦９年(1759)

口絵８　神社93　砥山神社　本殿　18世紀中期

口絵９　神社97　（沼田）榛名神社　本殿　17世紀初期

口絵10　神社50　（山名）八幡宮　本殿　明和４年（1767）

口絵11　神社31　(津久田)赤城神社　本殿　安永３年(1774)

口絵12　神社193　(篠塚)長柄神社　本殿　安永８年(1779)

口絵13　神社117　月夜野神社　本殿　18世紀後期

口絵14　神社15　大雷神社　本殿　寛政10年(1798)

口絵15　神社127　赤岩神社　本殿　文政２年(1819)

口絵16　神社81　(妙義)菅原神社　本殿　19世紀前期

口絵17　神社45　(角渕)八幡宮　本殿　元保２年(1831)

口絵18　神社90　(下仁田)諏訪神社　本殿　江戸末期

口絵19　神社13　伊勢崎神社　本殿　嘉永元年(1848)

口絵20　神社126　大國魂神社　本殿　江戸末期

口絵21　神社152　冠稲荷神社　聖天宮　安政４年(1857)

口絵22　神社37　(宿)稲荷神社　本殿　天治元年(1864)

口絵23　神社48　倉賀野神社　本殿　18世紀前期

口絵24　神社96　笹森稲荷神社　割拝殿　江戸後期

口絵25　神社52　（八幡）八幡宮　拝殿　宝暦７年（1757）

口絵26　神社３　（山王）日枝神社　拝殿　18世紀中期

口絵27　神社110　(川場湯原)武尊神社　社殿　19世紀初期

口絵28　神社44　玉村八幡宮　拝殿　18世紀初期

口絵29　神社116　(上牧)子持神社　覆屋　文化15年(1818)

口絵30　神社２　総社神社　拝殿　19世紀前期

口絵31　神社188　高鳥神社　拝殿　嘉永元年(1848)

口絵32　神社44　玉村八幡宮　随神門　慶応元年(1867)

例　言

（１）本報告書は群馬県地域創生部文化財保護課(現)が令和元年度から令和２年度にかけて実施した「群馬近世寺社建築総合調査」の報告書である。調査の委託先は一般社団法人群馬建築士会である。

（２）調査にあたり神社の所有者・管理者・氏子総代をはじめとする多くの方々、及び各市町村教育委員会の絶大な協力と貴重な資料の提供を受けた。

（３）調査は群馬県地域創生部文化財保護課が選定した対象建物を予備調査と本調査に分けて実施した。本調査の対象は既に文化財として指定・登録されている建物、予備調査において本調査とすべきと判断した建物、既に調査済みの建物である。

予備調査の内容は写真撮影と宮司等による聞き取り調査である。予備調査対象については概要表、解説文、写真を掲載した。

本調査の内容は写真撮影と宮司等による聞き取り調査に加え、建物等調査、資料調査等である。本調査対象については概要表、解説文、配置図、平面図、写真、資料を掲載した。

なお、まとめについては調査員の所感を掲載した。

（４）調査は５班体制でそれぞれの班にチームを編成し、複数の調査員で実施した。

（５）予備調査を実施した神社の中から、群馬近世寺社総合調査委員会が建築様式や建造年代等から貴重性が高いと判断した神社を選出し、本調査対象として本調査を実施した。

（６）建築解説における留意点は次の通りである。

・規模は正面、側面を間数（柱間数)、(　) 内に実測値（単位m）を示す。

・屋根の重数は二重以上を記し、一重の場合は記さない。

・写真等で特記無きものは執筆者及びチーム調査員が撮影したものである。

・図面は特記無きものは調査者の実測によるものである。なお、縮尺は紙幅の都合上統一されていない。寸法は㎜で統一した。なお、小数第３位を四捨五入したので、必ずしも引き通し寸法に一致しない。

（７）推定建造年代等の時代区分は次の通りとする。

１世紀を３等分し前期・中期・後期とするが、必要に応じて世紀を２等分する前半・後半も採用する。それでも絞れない場合は、江戸時代を４期に分けて前期〔元和元年(1615)～万治３年(1660)〕、中期〔寛文元年(1661)～寛延３年(1750)〕、後期〔宝暦元年(1751)～文政12年(1829)〕、末期〔天保元年(1830)～慶応３年(1867)〕とした。

（８）本調査及び予備調査の解説は次の通りとする。

・本調査及び予備調査の解説は前橋市を最初とする市町村順とし、同一市町村ではそれぞれ調査順に並べた。

・１対象施設で複数棟ある場合の調査解説は重要度及び貴重な建物から順に並べた。

（９）予備調査の結果、建替により近世の建物でないと判明した神社ならびに予備調査は実施したが本調査ができなかった神社は除いた。

(10) 群馬県近世寺社総合調査報告書は本編、寺院編、神社編からなるが、本書はその神社編である。

(11) 各建物解説における表の構造・形式欄に示す規模は身舎のものである。

(12) 神社名は原則として宗教法人名簿、及び各神社が使用している呼称とした。なお同一名の場合は神社の前に（　）地域名を記した。

(13) 寺院における神社本殿は、便宜的に寺院建築として扱った。

(14) 調査体制

群馬近世寺社総合調査委員会の指導のもと、群馬建築士会ヘリテージマネージャー協議会のヘリテージマネージャーが実査した。

・調査委員会

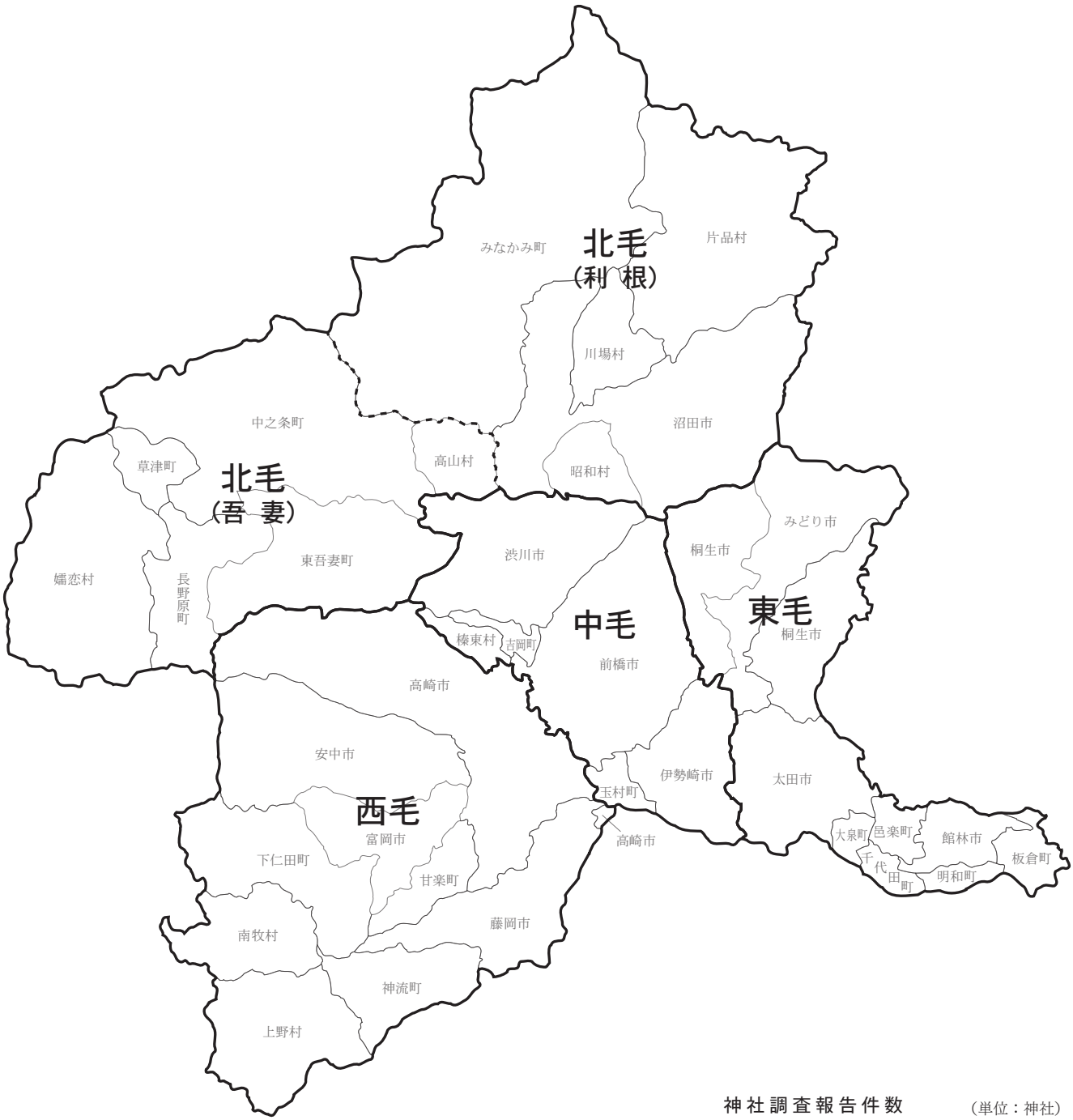
委員長　村田敬一
（前橋工科大学客員教授）

委　員　上野勝久
（東京藝術大学大学院美術研究科教授）

委　員　大橋竜太
（東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授）

委　員　大野　敏
（横浜国立大学都市科学部建築学科教授）

神社調査地区別図



神社調査報告件数　（単位：神社）

地　域		本調査	予備調査	合　計
中　　毛		25	21	46
西　　毛		34	15	49
北　　毛		31	13	44
	（利根）	21	7	28
	（吾妻）	10	6	16
東　　毛		17	34	51
合　計		107	83	190

地区別調査対象神社一覧表

※名称の網掛けは本調査実施。報告№の空欄は報告書掲載なし。

報告№	調査№	地区	所在地		名称	予備調査
1	1	中毛	前橋市	下大屋町	産泰神社	
2	2			元総社町	総社神社	
3	3			山王町	(山王)日枝神社	○
4	4			総社町桜が丘	(植野)稲荷神社	○
5	5			二之宮町	二宮赤城神社	○
6	6			上佐鳥町	春日神社	○
7	7			滝窪町	八柱神社	○
8	8			河原浜町	大胡神社	○
9	9			粕川町月田	(月田)近戸神社	○
10	10			粕川町深津	(深津)近戸神社	○
11	11			三夜沢町	三夜沢赤城神社	
12	12			富士見町横室	(横室)赤城神社	○
13	13		伊勢崎市	本町	伊勢崎神社	
14	14			柴町	(柴)八幡神社	
15	15			西久保町	大雷神社	○
16	16			市場町	(市場)八坂神社	○
17	17			東小保方町	小泉稲荷神社	○
18	18			田部井町	鹿嶋宮	○
19	19			境平塚	(平塚)赤城神社	
20	20			境下淵名	大國神社	○
21	21		渋川市	渋川	(渋川)八幡宮	
22	22			中村	(中村)早尾神社	
23	23			半田	(半田)早尾神社	
24	24			祖母島	武内神社	○
25	25			行幸田	(行幸田)甲波宿祢神社	○
26	26			川島	(川島)甲波宿祢神社	○
27	27			北橘町下南室	(下南室)赤城神社	○
28	28			北橘町下箱田	木曾三社神社	○
29	29			伊香保町湯中子	(湯中子)大山祇神社	○
30	30			中郷	(中郷)菅原神社	
31	31			赤城町津久田	(津久田)赤城神社	○
32	32			小野子	七社神社	○
33	33		榛東村	山子田	常将神社	
34	34			新井	(新井)八幡社	○
35	35			長岡	(長岡)大宮神社	○
36	36			新井	大山祇神社	○
37	37			広馬場	(宿)稲荷神社	
38	38		吉岡町	大久保	三宮神社	
39	39			上野田	瀧泉神社	○
40	40			北下	(北下)諏訪神社	○
41	41			南下	(上)八幡神社	○
42	42			南下	(下)八幡宮	○
43	43			下野田	野田神社	○
44	44		玉村町	下新田	玉村八幡宮	
45	45			角渕	(角渕)八幡宮	○
46	46			下之宮	火雷神社	○
47	47	西毛	高崎市	あら町	あら町諏訪神社	
48	48	西毛	高崎市	倉賀野町	倉賀野神社	
49	49			石原町	小祝神社	
50	50			山名町	(山名)八幡宮	
51	51			上小塙町	烏子稲荷神社	
52	52			八幡町	(八幡)八幡宮	
53	53			小八木町	鏡宮神社	○
54	54			上並榎町	(上並榎)日枝神社	○
55	55			下豊岡町	若宮八幡宮	○
56	56			榛名山町	榛名神社	
57	57			下里見町	郷見神社	○
58	58			本郷町	榛名木戸神社	○
59	59			倉渕町三ノ倉	石上神社	○
60	60			倉渕町三ノ倉	戸春名神社	○
61	61			倉渕町川浦	(川浦)諏訪神社	○
62	62			倉渕町権田	椿名神社	○
63	63			箕郷町生原	(生原)北野神社	
64	64			箕郷町善地	月波神社	○
65	65			箕郷町柏木沢	赤城若御子神社	○
66	66			稲荷台町	(稲荷台)稲荷神社	○
	67			新町	(新町)諏訪神社	○
68	68			吉井町吉井	(吉井)八幡宮	○
69	69			吉井町神保	辛科神社	
70	70		藤岡市	本郷	土師神社	
71	71			小林	大塔寺天満宮	
72	72			東平井	(秋葉)諏訪神社	○
73	73			下日野	地守神社	○
74	74			鬼石	鬼石神社	○
75	75			譲原	子寶神社	○
76	76			譲原	(譲原)愛宕神社	○
77	77		富岡市	一ノ宮	一之宮貫前神社	
78	78			上高瀬	横瀬八幡宮	
79	79			富岡	(富岡)諏訪神社	○
80	80			妙義町妙義	妙義神社	
81	81			妙義町管原	(妙義)菅原神社	
82	82			妙義町下高田	高太神社	
83	83			妙義町下高田	伏見神社	○
84	84		安中市	安中	(安中)熊野神社	
85	85			松井田町新堀	(松井田)八幡宮	
86	86		上野村	新羽	新羽神社	○
87	87		神流町	小平	土生神社	○
88	88			万場	(万場)八幡宮	○
89	89			魚尾	中山神社	○
90	90		下仁田町	下仁田	(下仁田)諏訪神社	
91	91		南牧村	桧沢	檜沢神社	
92	92			砥沢	砥沢神社	○
93	93			砥沢	砥山神社	○
94	94			大仁田	大仁田神社	○

報告No.	調査No.	地区	所在地		名称	予備調査
95	95	西毛	甘楽町	小幡	小幡八幡宮	○
96	96			福島	笹森稲荷神社	○
97	97	北毛（利根）	沼田市	榛名町	(沼田)榛名神社	
98	98			中町	須賀神社	
99	99			戸鹿野町	(戸鹿野)八幡宮	○
100	100			上川田町	(上川田)砥石神社	○
101	101			利根町大原	大原神社	○
102	102			利根町平川	(平川)日光神社	○
103	103			利根町日影南郷	(日影南郷)武尊神社	○
	104			白沢町生枝	生枝神社	○
105	105			白沢町高平	白佐波神社	○
106	106			白沢町下古語父	(下古語父)諏訪神社	○
107	107		片品村	花咲	(花咲)武尊神社	○
108	108			土出	(土出)諏訪神社	○
109	109			針山	(針山)稲荷神社	○
110	110		川場村	川場湯原	(川場湯原)武尊神社	
111	111			谷地	(谷地)諏訪神社	○
112	112		昭和村	川額	(川額)八幡宮	
113	113			橡久保	千賀戸神社	○
114	114			貝野瀬	(貝野瀬)武尊神社	
115	115			糸井	小高神社	○
116	116		みなかみ町	上牧	(上牧)子持神社	
117	117			月夜野	月夜野神社	
118	118			下津	(中村)天満宮	○
119	119			小仁田	大峯神社	
120	120			谷川	(谷川)冨士浅間神社	
121	121			小日向	(小日向)菅原神社	
122	122			藤原	藤原諏訪神社	○
123	123			須川	(須川)熊野神社	○
124	124			相俣	(相俣)日枝神社	○
125	125			羽場	(羽場)日枝神社	○
126	126	北毛（吾妻）	中之条町	中之条町	大國魂神社	
	127			横尾	吾妻神社	○
127	128			赤岩	赤岩神社	
128	129		長野原町	林	王城山神社	○
129	130			羽根尾	羽根尾神社	○
130	131			与喜屋	養蚕神社	○
131	132			応桑	(狩宿)諏訪神社	○
132	133			応桑	(応桑)諏訪神社	○
	134		嬬恋村	大前	(大前)諏訪神社	○
134	135			大笹	大笹神社	○
135	136		草津町	草津	白根神社	○
136	137		高山村	中山	三島神社	
137	138			尻高	北之谷稲荷神社	○
138	139		東吾妻町	原町	大宮巌鼓神社	
139	140			奥田	白鳥神社	○
140	141			矢倉	鳥頭神社	○
141	142			岩下	(岩下)菅原神社	○
142	143			箱島	(箱島)甲波宿祢神社	
143	144	東毛	桐生市	天神町	(桐生)天満宮	
144	145			川内町	(川内一丁目)赤城神社	○
145	146	東毛	桐生市	川内町	(川内五丁目)赤城神社	○
146	147			梅田町	(皆沢)八幡宮	
147	148			新里町新川	(新川)雷電神社	○
148	149			新里町関	(関)八幡宮	○
149	150			黒保根町上田沢	栗生神社	
150	151			黒保根町上田沢	赤城大明神(醫光寺境内)	○
151	152			黒保根町下田沢楡沢平	(楡沢平)赤城神社	○
152	153		太田市	細谷町	冠稲荷神社	
153	154			世良田町	(世良田)東照宮	
154	155			阿久津町	(阿久津)稲荷神社	○
155	156			押切町	三柱神社	○
156	157			岩松町	(岩松)八幡宮	○
157	158			尾島町	(尾島)雷電神社	○
158	159			世良田町	(世良田)八坂神社	○
159	160			新田木崎町	貴先神社	○
160	161			新田市町	(新田市)神明宮	○
161	162			新田市野井町	(市野井)生品神社	○
162	163			大久保町	(大久保)赤城神社	○
163	164		館林市	上早川田町	(上早川田)雷電神社	○
164	165			足次町	(足次)赤城神社	○
165	166			栄町	正田稲荷神社	○
166	167			本町	青梅神社	○
167	168			西本町	(西本町)愛宕神社	○
168	169		みどり市	笠懸町阿左美	(阿左美)生品神社	
169	170			笠懸町阿左美	(浅海)八幡宮	○
170	171			笠懸町阿左美	(阿左美)稲荷神社	○
171	172			笠懸町鹿	(鹿)赤城神社	○
172	173			笠懸町鹿	百品神社	○
173	174			西鹿田	金山神社	○
174	175			大間々町桐原	(遠ノ久保)稲荷神社	○
175	176			大間々町小平	八王子神社	○
176	177			大間々町長尾根	(長尾根)十二山神社	○
177	178			大間々町上神梅	六合神社	○
178	179			大間々町小平	嵯峨宮	○
179	180			大間々町上神梅	神梅神社	○
180	181			大間々町浅原	(浅原)菅原神社	○
181	182			大間々町浅原	鈴香神社	○
182	183			大間々町長尾根	(長尾根)熊野神社	○
183	184			大間々町桐原	(間坂)神明宮	○
184	185			大間々町小平	木宮神社	○
185	186			大間々町桐原	杉森稲荷神社	○
186	187			東町小夜戸	(小夜戸)稲荷神社	
187	188		板倉町	板倉	(板倉)雷電神社	
188	189			大高嶋	高鳥神社	
189	190		明和町	梅原	三嶋神社	○
190	191			川俣	粟島神社	○
191	192		千代田町	舞木	(舞木)長良神社	○
192	193			赤岩	(赤岩)八幡神社	○
193	194		邑楽町	篠塚	(篠塚)長柄神社	

※報告No.空欄は調査実施したが現代建築等により欠番とした。

予備調査実施件数　135
本調査実施件数　107
（予備調査から本調査　43）

目　　次

口　絵

例　言

神社調査地区別図

目　次

１．本 調 査：神社建築 …… 1

２．予備調査：神社建築 …… 399

３．付

神社建築用語の解説 …… 441

本調査報告書目次

報告No.	地区	所在地		名称	頁
1	中毛	前橋市	下大屋町559	産泰神社	1
2			元総社町1-31-45	総社神社	7
3			山王町14-2	(山王)日枝神社	11
11			三夜沢町114	三夜沢赤城神社	15
13		伊勢崎市	本町21-1	伊勢崎神社	19
14			柴町693	(柴)八幡神社	22
15			西久保町3-859	大雷神社	27
19			境平塚1206-2	(平塚)赤城神社	30
20			境下淵名2827	大國神社	33
21		渋川市	渋川1	(渋川)八幡宮	37
22			中村31	(中村)早尾神社	40
23			半田1439	(半田)早尾神社	43
25			行幸田673	(行幸田)甲波宿祢神社	46
28			北橘町下箱田甲1	木曾三社神社	51
29			伊香保町湯中子940	(湯中子)大山祇神社	55
30			中郷1733	(中郷)菅原神社	58
31			赤城町津久田甲358	(津久田)赤城神社	61
32			小野子2158	七社神社	64
33		榛東村	山子田2527	常将神社	68
37			広馬場4195-6	(宿)稲荷神社	73
38		吉岡町	大久保字宮1	三宮神社	78
40			北下505	(北下)諏訪神社	81
44		玉村町	下新田1	玉村八幡宮	84
45			角渕2075	(角渕)八幡宮	91
46			下之宮甲524	火雷神社	94
47	西毛	高崎市	あら町85-1	あら町諏訪神社	98
48			倉賀野町1263	倉賀野神社	100
49			石原町1245	小祝神社	105
50			山名町1581-1	(山名)八幡宮	109
51			上小塙町564	烏子稲荷神社	114
52			八幡町甲655	(八幡)八幡宮	118
56			榛名山町甲849	榛名神社	129
57			下里見町1443	郷見神社	143
58			本郷町644	榛名木戸神社	148
60			倉渕町三ノ倉4040	戸春名神社	151
62			倉渕町権田60	椿名神社	154
63			箕郷町生原1	(生原)北野神社	157
68			吉井町吉井甲372	(吉井)八幡宮	160
69			吉井町神保甲435	辛科神社	163
70		藤岡市	本郷字下郷168	土師神社	167
71			小林中里608	大塔寺天満宮	169
73			下日野2238	地守神社	171
75			譲原甲644	子寶神社	175
77		富岡市	一ノ宮1535	一之宮貫前神社	177
78			上高瀬864	横瀬八幡宮	183
80			妙義町妙義3	妙義神社	185
81			妙義町管原1423	(妙義)菅原神社	194
82			妙義町下高田661	高太神社	197
84		安中市	安中3-22-47	(安中)熊野神社	200
85			松井田町新堀1497	(松井田)八幡宮	204
86		上野村	新羽540	新羽神社	208
87		神流町	小平460	土生神社	211
88			万場72	(万場)八幡宮	213
89			魚尾719	中山神社	217

報告No.	地区	所在地		名称	頁
90	西毛	下仁田町	下仁田319	(下仁田)諏訪神社	219
91		南牧村	桧沢651	檜沢神社	223
93			砥沢1301	砥山神社	226
94			大仁田1668	大仁田神社	229
96		甘楽町	福島1350	笹森稲荷神社	231
97	北毛(利根)	沼田市	榛名町2851	(沼田)榛名神社	235
98			中町1141	須賀神社	238
99			戸鹿野町800	(戸鹿野)八幡宮	242
102			利根町平川甲777	(平川)日光神社	246
106			白沢町下古語父字欅反609	(下古語父)諏訪神社	248
107		片品村	花咲2021	(花咲)武尊神社	250
110		川場村	川場湯原649	(川場湯原)武尊神社	252
111			谷地353	(谷地)諏訪神社	255
112		昭和村	川額1007	(川額)八幡宮	259
113			橡久保101	千賀戸神社	262
114			貝野瀬1132	(貝野瀬)武尊神社	265
115			糸井1295	小高神社	269
116		みなかみ町	上牧528	(上牧)子持神社	273
117			月夜野1259	月夜野神社	277
118			下津2332	(中村)天満宮	280
119			小仁田74	大峯神社	283
120			谷川533	(谷川)冨士浅間神社	286
121			小日向473	(小日向)菅原神社	289
122			藤原3419	藤原諏訪神社	292
123			須川798	(須川)熊野神社	295
125			羽場588	(羽場)日枝神社	299
126	北毛(吾妻)	中之条町	中之条町890	大國魂神社	303
127			赤岩字中野651	赤岩神社	305
128		長野原町	林502	王城山神社	307
134		嬬恋村	大笹字塩ノ島176-1	大笹神社	310
135		草津町	草津字囲山538	白根神社	313
136		高山村	中山5546	三島神社	316
137			尻高4300-2	北之谷稲荷神社	321
138		東吾妻町	原町811	大宮巌鼓神社	325
141			岩下1581	(岩下)菅原神社	328
142			箱島1136	(箱島)甲波宿祢神社	332
143	東毛	桐生市	天神町1-2-1	(桐生)天満宮	336
146			梅田町4-6914	(皆沢)八幡宮	342
149			黒保根町上田沢2238	栗生神社	345
151			黒保根町下田沢楡沢平	(楡沢平)赤城神社	348
152		太田市	細谷町1	冠稲荷神社	350
153			世良田町3119-1	(世良田)東照宮	355
154			阿久津町102	(阿久津)稲荷神社	359
158			世良田町1497	(世良田)八坂神社	364
163		館林市	上早川田町566	(上早川田)雷電神社	368
168		みどり市	笠懸町阿左美210	(阿左美)生品神社	372
173			笠懸町西鹿田839	金山神社	374
178			大間々町小平348	嵯峨宮	376
186			東町小夜戸961	(小夜戸)稲荷神社	378
187		板倉町	板倉2334	(板倉)雷電神社	380
188			大高嶋1665	高鳥神社	386
191		千代田町	舞木甲267	(舞木)長良神社	392
193		邑楽町	篠塚甲2907	(篠塚)長柄神社	395

予備調査報告書目次

報告No.	地区	所在地		名称	頁
4	中毛	前橋市	総社町桜が丘1039-2	(植野)稲荷神社	399
5			二之宮町886	二宮赤城神社	399
6			上佐鳥町368-1	春日神社	400
7			滝窪町457	八柱神社	400
8			河原浜町615	大胡神社	401
9			粕川町月田1261	(月田)近戸神社	401
10			粕川町深津甲1437	(深津)近戸神社	402
12			富士見町横室甲55	(横室)赤城神社	402
16		伊勢崎市	市場町1-1593	(市場)八坂神社	403
17			東小保方町155-1	小泉稲荷神社	403
18			田部井町1-1126	鹿嶋宮	404
24		渋川市	祖母島甲499	武内神社	404
26			川島1287	(川島)甲波宿祢神社	405
27			北橘町下南室311	(下南室)赤城神社	405
34		榛東村	新井674	(新井)八幡社	406
35			長岡481	(長岡)大宮神社	406
36			新井2855	大山祇神社	407
39		吉岡町	上野田甲950	瀧泉神社	407
41			南下180	(上)八幡神社	408
42			南下848	(下)八幡宮	408
43			下野田996	野田神社	409
53	西毛	高崎市	小八木町14	鏡宮神社	409
54			上並榎町1150	(上並榎)日枝神社	410
55			下豊岡町甲1428	若宮八幡宮	410
59			倉渕町三ノ倉1925	石上神社	411
61			倉渕町川浦1304	(川浦)諏訪神社	411
64			箕郷町善地1641	月波神社	412
65			箕郷町柏木沢1261	赤城若御子神社	412
66			稲荷台町347	(稲荷台)稲荷神社	413
72		藤岡市	東平井1108	(秋葉)諏訪神社	413
74			鬼石721	鬼石神社	414
76			譲原2451	(譲原)愛宕神社	414
79		富岡市	富岡1130	(富岡)諏訪神社	415
83			妙義町下高田甲1312	伏見神社	415
92		南牧村	砥沢277	砥沢神社	416
95		甘楽町	小幡1	小幡八幡宮	416
100	北毛(利根)	沼田市	上川田町2251	(上川田)砥石神社	417
101			利根町大原字東宿1224	大原神社	417
103			利根町日影南郷166	(日影南郷)武尊神社	418
105			白沢町高平字一本木154	白佐波神社	418
108		片品村	土出2017	(土出)諏訪神社	419
109			針山108	(針山)稲荷神社	419
124		みなかみ町	相俣1457	(相俣)日枝神社	420

報告No.	地区	所在地		名称	頁
129	北毛(吾妻)	長野原町	羽根尾字宮原100	羽根尾神社	420
130			与喜屋字萩原314	養蚕神社	421
131			応桑1305-1	(狩宿)諏訪神社	421
132			応桑新田16	(応桑)諏訪神社	422
139		東吾妻町	奥田967	白鳥神社	422
140			矢倉899	鳥頭神社	423
144	東毛	桐生市	川内町1-甲552	(川内一丁目)赤城神社	423
145			川内町5-2352	(川内五丁目)赤城神社	424
147			新里町新川1876	(新川)雷電神社	424
148			新里町関381	(関)八幡宮	425
150			黒保根町上田沢湧丸326	赤城大明神(醫光寺境内)	425
155		太田市	押切町512	三柱神社	426
156			岩松町251	(岩松)八幡宮	426
157			尾島町169-1	(尾島)雷電神社	427
159			新田木崎町甲637	貴先神社	427
160			新田市町3060	(新田市)神明宮	428
161			新田市野井町1972	(市野井)生品神社	428
162			大久保町135-1	(大久保)赤城神社	429
164		館林市	足次町494	(足次)赤城神社	429
165			栄町3-1	正田稲荷神社	430
166			本町2-8-22	青梅神社	430
167			西本町9-59	(西本町)愛宕神社	431
169		みどり市	笠懸町阿左美1175	(浅海)八幡宮	431
170			笠懸町阿左美1800	(阿左美)稲荷神社	432
171			笠懸町鹿2693	(鹿)赤城神社	432
172			笠懸町鹿1210	百品神社	433
174			大間々町桐原589-1	(遠ノ久保)稲荷神社	433
175			大間々町小平637	八王子神社	434
176			大間々町長尾根244	(長尾根)十二山神社	434
177			大間々町上神梅634	六合神社	435
179			大間々町上神梅60	神梅神社	435
180			大間々町浅原1263-1	(浅原)菅原神社	436
181			大間々町浅原1601-4	鈴香神社	436
182			大間々町長尾根372-1	(長尾根)熊野神社	437
183			大間々町桐原1040	(間坂)神明宮	437
184			大間々町小平1197-1	木宮神社	438
185			大間々町桐原341	杉森稲荷神社	438
189		明和町	梅原262	三嶋神社	439
190			川俣67-1	粟島神社	439
192		千代田町	赤岩1094	(赤岩)八幡神社	440

1　産泰神社〔さんたいじんじゃ〕

表１－１

神　社　名	産泰神社（さんたいじんじゃ）	所　在　地	前橋市下大屋町569
旧　社　格	村社	所有者・管理者	宗教法人　産泰神社
主　祭　神	木花佐久夜毘売命（このはなさくやひめ）	神　事	奉納される太々神楽は、明和元年(1764)の奉納額があり、現在も23坐が伝えられている。
創立・沿革	明治28年(1895)の神社取調帳によれば、社殿の古誌古記録は小田原北条氏の乱で焼滅し、鎮座年暦は詳らかでなく、言伝えによれば、日本武尊東征の折この地に勧請したといい、また履中天皇の御宇元年ともいう。前橋市史によれば、信仰は境内の巨石崇拝に始まり、古い南参道があると記し、前橋城主酒井氏が城の守護のために西に向けたと伝えられているとする。明治41年に下大屋町内の12社を合祀した。		
文化財指定	産泰神社本殿・幣殿・拝殿・神門及び境内地(県重文　平成６年３月)、産泰神社八稜鏡(市重文　昭和49年８月　県立歴史博物館収蔵)、産泰神社太々神楽(市重無民　昭和49年９月)		

位置・配置（図１－１、写１－１）

前橋市東部の下大屋町に位置する。東には大室古墳群があり、赤城山南麓の日照・水利性から古くより村落が分布する農村地帯である。境内は県道76号線（通称 産泰道路）から参道を経て、石段を上がった高台に鎮座する。正面を西向きとし、参道、神門、拝殿、幣殿及び本殿を一直線に並び建てている。社殿の左手（北側）に神楽殿を備え、裏手の一段高い地に金刀比羅宮と石祠の末社群を祀る。ほか、新しく建築された授与所、社務所及び収蔵庫を配置する。境内周囲は鬱蒼とした樹木で覆われ、鎮守の森として地域の景観を形成している。

由来および沿革

境内には、15～13万年前の赤城山南斜面山体崩壊で発生した岩屑雪崩による磐座群があり、古代より信仰の地であったことがうかがえる。産泰の名は赤城山頂の大沼（千手観音菩薩）、小沼（虚空蔵菩薩）、地蔵岳（地蔵菩薩）の三体に由来するともいわれる。祭神は木花佐久夜毘売命である。

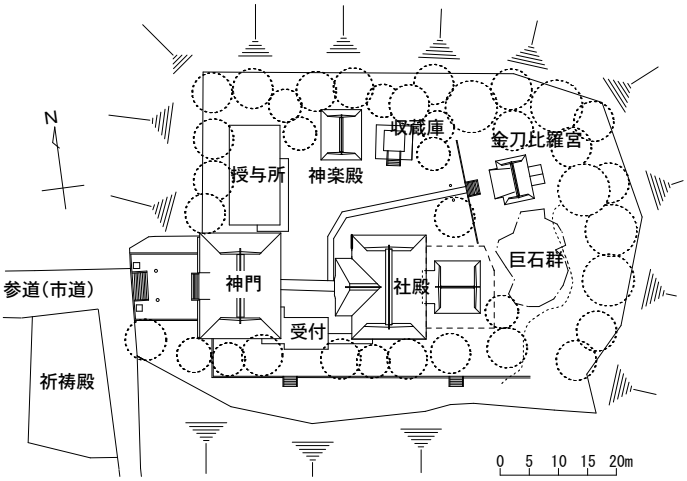


図１－１　配置図

明治28年(1895)の神社取調帳によれば、社殿の古誌古記録は小田原北条氏の乱で焼滅し、鎮座年暦は詳らかでなく、言伝えによれば日本武尊東征の折この地に勧請したとも、また履中天皇の御宇元年とも

写１－１　境内全景

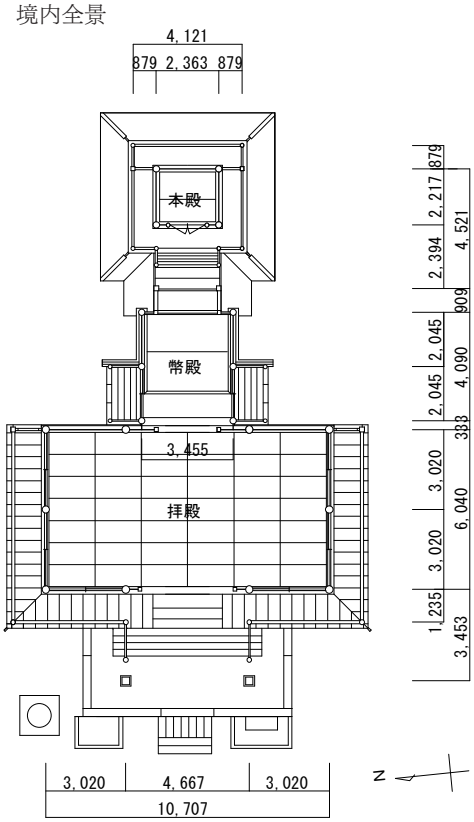


図１－２　平面図(社殿)

伝わる。厩橋藩四代藩主酒井忠清は、崇敬厚く城の守護神とし酒井家は播磨に国替後も代参した。

享和元年(1801)正一位、明治41年に下大屋町内の12社を合祀している旧村社である。県内外から多くの参拝者が安産祈願に訪れ、江戸期より抜け柄杓を奉納する習慣があり、磐座は胎内くぐりとして信仰される。例祭日は４月18日、太々神楽（市指定重要無形民俗文化財）が奉納される。平成６年に本殿、幣殿、拝殿、神門、境内地が県指定文化財となった

本殿（ほんでん）（図１－２、表１－２、写１－２～１－７）

建造年代は棟札より宝暦13年(1763)である。2019年に長押裏から新たに木札が発見され、大工棟梁武州玉ノ井 今村修利ほか２名が確認された。１間社側面１間の入母屋造妻入で正面に１間の向拝を付している。出組は身舎の柱上を二手先（彫刻尾垂木付)、腰を出組、向拝を出組・連三斗とする。彫刻は各部に及ぶ。身舎では木鼻（獅子丸彫)、柱（金襴巻)、内法長押（地紋彫)、板支輪、尾垂木、胴部及び腰部、向拝では木鼻（獅子・貘丸彫)、中備（松に鷹）及び手挟（牡丹丸彫）にみられる。当本殿は全体的に部材が細身で繊細且つ色彩豊かな意匠となっている。一方、彫刻で埋め尽くされている身舎の胴部及び腰部は、当初は板羽目の状態であった。取付けの状況から後付けであることが判明している。彫刻の題材は二十四孝や高砂、故事等と分かり易く親しみ易い。彫師については棟札に記載なく詳らかでない。

表１－２　本殿

建造年代／根拠	宝暦13年(1763)／棟札	構造・形式	１間社、側面１間、入母屋造、妻入、向拝１間、銅板葺(当初茅葺)
工匠	大工：武州玉ノ井 今村修利、俵屋喜七、高橋義七(令和元年確認の棟札による)	基礎	切石基壇、切石基礎・亀腹
軸部	[身舎]丸柱、貫、長押　[腰組]角柱、土台　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎外部]二手先、連続斗　[身舎内部]出組　[腰組]出組　[向拝]出組、連三斗
中備	なし、彫刻	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻飾	虹梁大瓶束	柱間装置	桟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子、木階５級、登高欄、浜縁	床	拭板
天井	棹縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、極彩色(彫刻)	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明
彫刻	[身舎]胴羽目・腰羽目・高羽目・脇障子(二十四孝・高砂・故事等)、木鼻丸彫(頭貫獅子・尾垂木龍・縁頭貫菊花及び波に亀)、内法長押(地紋彫・蜀江紋)、支輪(雲紋)　[向拝]虹梁木鼻(獅子・貘)、側面絵様に菊花、中備(松に鷹)、手挟(牡丹)、柱地紋彫(青海波・紗綾形)		

写１－２　全景

写１－３　南側面

写１－４　北側面

写１－５　腰組

写１－６　向背側面(内側)

写１－７　向背水引虹梁(内側)

幣殿（図１－２、表１－３、写１－８～１－10）

切妻造妻入拝殿に接続する。建造年を示す棟札等を確認できないが、内部格天井の絵師（上増田村住人・積美圓恵水）が拝殿の絵師と同人物と思われ、建築様式からも拝殿と同年代（19世紀前期）の建造と推定される。また、東側面の桟唐戸には「嘉永三戌年(1848)」の落書が残されている。木鼻、胴羽目及び支輪には彫刻が施され、両側面の胴羽目は鯉の滝登りが題材とされている。彫刻は一様に極彩色で塗られている。内部は拝殿から床を一段上げた畳敷とされ、格天井となっている。天井の鏡板24枚には源氏物語が艶やかに描かれている。

拝殿（図１－２、表１－４、写１－11～１－16）

建造年は棟札より文化９年(1812)である。大工棟梁は信州諏訪の矢崎久右衛門元形(1762～1827)、大隅流伊藤庄兵衛の一門である。正面３間、側面２間の入母屋造平入で、正面に寄せ棟軒唐破風付向拝を付ける。量感のある屋根は元の茅葺形状を生かし銅板葺きに葺き替えられている。組物は身舎を二手

表１－３　幣殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築	構造・形式	正面１間(3.45m)、側面２間(4.09m)、切妻造、妻入、銅板葺
工匠	不明	基礎	切石基礎
軸部	丸柱、貫、長押	組物	出組
中備	本蟇股	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻飾	なし	柱間装置	桟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	木階４級、擬宝珠登高欄	床	畳
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、極彩色(彫刻)	飾金物等	なし
絵画	天井画(源氏物語)	材質	不明
彫刻	木鼻(水紋・鯉)、胴羽目(鯉滝上り)、蟇股(草木・鳥)、拝殿境蹴込部(鯉・水紋、牡丹)、支輪(水紋・花)		

写１－８　内部正面

写１－９　本殿接続部

写１－10　南側面

表１－４　拝殿

建造年代／根拠	文化９年(1812)／棟札	構造・形式	正面３間、側面２間、入母屋造、平入、向拝１間、軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工匠	[大工]棟梁 信州諏訪群上桑原村 矢崎久右衛門元形、同中通邑 浅谷彦兵衛、越後国蒲原郡南田村 山本藤蔵・好明、同三嶋郡道半村 白井定蔵・義重　[塗師]棟梁 信州高井郡中野村 梶川一舩清房	基礎	切石基礎
軸部	[身舎]丸柱、虹梁、貫、長押　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟２対	組物	[身舎外部]二手先　[身舎内部]出組　[腰組]平三斗　[向拝]出組２段
中備	なし	軒	[身舎]二軒繁垂木、板支輪　[向拝]二軒繁垂木、茨垂木(唐破風部)
妻飾	[身舎]二重虹梁大瓶束　[向拝]虹梁、彫刻、兎毛通	柱間装置	桟唐戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	畳
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、極彩色(彫刻)	飾金物等	錺金具(桟唐戸)
絵画	天井画(花鳥)、江戸下谷・壽笑亭泉一重、増田村・久川恵水(墨書)	材質	欅
彫刻	[身舎]木鼻(龍・象)、虹梁(渦・若葉)、脇障子(中国故事)、内法長押(地紋彫・蜀江紋)、支輪(雲紋)　[向拝]虹梁木鼻(獅子・貘)、虹梁(唐草文様浮彫)、蝦虹梁(龍)、手挟(牡丹・兎)、柱地紋彫、中備(龍に乗る仙人)、妻飾、兎毛通(鳳凰)		

写１－11　正面

写１－12　北面

写１－13　向背正面

写１－14　向背側面

写１－15　内部

写１－16　内部天井

先、向拝を出組（２段）とし、丸彫の木鼻を付ける。向拝各部には意匠を凝らした彫刻が配され、海老虹梁には透し彫の龍が付けられている。内部は畳敷・格天井、組物を出組とし、正面に虹梁を架け渡す。天井鏡板には花木と鳥の彩色画が描かれ、「増田住人 文化十三子年(1816)　久川恵水」の墨書が残る。

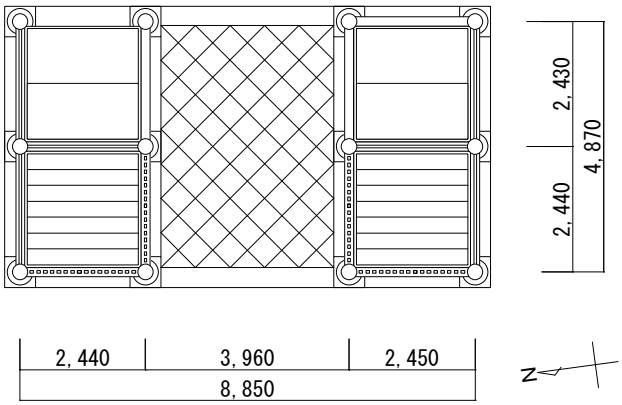


図１－３　平面図(神門)

神門（しんもん）（図１－３、表１－５、写１－17～１－19）

建造年は棟札より天保４年(1833)である。３間１戸八脚門、入母屋造平入銅板葺（茅葺）、正面を軒

表１－５　神門

建造年代／根拠	天保４年(1833)／棟札	構造・形式	３間１戸八脚門(8.85m)、側面２間(4.87m) 入母屋造、平入軒唐破風付銅板葺(当初茅葺)
工匠	不明	基礎	切石基壇、礎盤
軸部	丸柱(粽)、虹梁、貫、台輪	組物	三手先(尾垂木)
中備	[外部]間斗束　[内部]蟇股(彫刻)	軒	二軒繁垂木、支輪(彫刻)
妻飾	虹梁大瓶束	柱間装置	板羽目(貫見せ)、格子(随身部)
縁・高欄・脇障子	なし	床	切石四半敷
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	欅
彫刻	木鼻(獅子・象・牡丹籠彫)、尾垂木(辰・象)		

写１－17　正面

写１－18　正面 虹梁・組物

写１－19　木鼻・組物

唐破風とする。正面左右には随身が置かれる。軸部は切石基礎、礎盤に粽付き丸柱を石端立てとし、貫で固め台輪を廻す。組物は外部を三手先尾垂木付、内部を出組。中備は外部を間斗束、内部本柱筋に彫刻蟇股を置く。軒は二軒繁垂木で彫刻板支輪が二重に付される。彫刻は内法から上部にみられる。木鼻の丸彫（獅子・家）、籠彫（牡丹）、虹梁の浮彫（流水紋ほか）、尾垂木の丸彫（辰・家）は、いずれも写実的で力強い。これらは欅の素木仕上である。和様を基調とするが、礎盤、柱粽及び台輪の使用、尾垂木の反り形状に禅宗様がみられる。

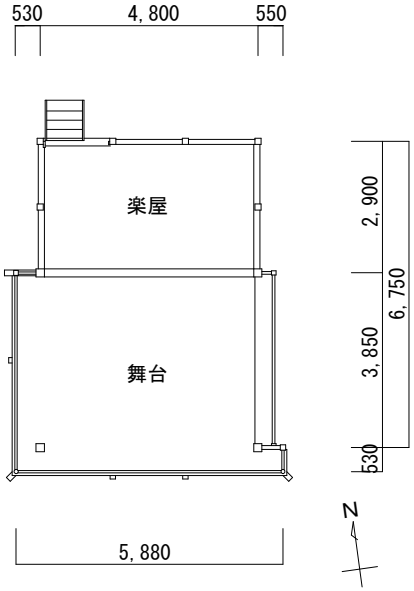


図１－４　平面図(神楽殿)

神楽殿（図１－４、表１－６、写１－20～１－22）

建造年は棟札・資料等がなく詳らかでない。奉納額に明和元年(1764)のものが現存する。正面３間、側面４間、入母屋造妻入銅板葺（当初茅葺）、軒をせがい造とする。上層が舞台で背面側を楽屋とする。舞台は正面及び側面一部を持送りで張出し開け放っている。下層は四方を壁で覆い物入等の用途としている。装飾は限定的で、正面及び左側面に出組、中備に出組と撥束、絵様付の板支輪にみられる。虹梁の唐草紋様の特徴等から18世紀後期と推測される。

金刀比羅宮（図１－５、表１－７、写１－23～１－25）

建造は文化７年(1810)、棟札による。拝殿と同じ

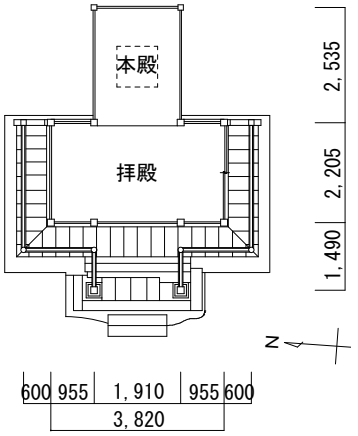


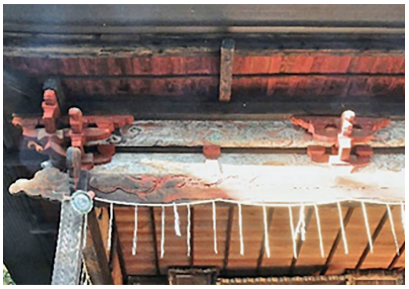
図１－５　平面図(金毘羅宮)

表１－６　神楽殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面4.8m、側面6.75m、入母屋造妻入銅板葺(当初茅葺)
工匠	不明	基礎	切石基壇
軸部	角柱、土台、虹梁、貫	組物	出組(正面及び西側面１間)
中備	詰組、撥束	軒	せがい梁、竿縁天井
妻飾	変形木連格子	柱間装置	板壁
縁・高欄・脇障子	榑縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	拭板
天井	せがい梁、竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、極彩色(軒支輪・虹梁上羽目板)	飾金物等	なし
絵画	軒支輪・虹梁上羽目板：龍、唐草紋	材質	杉
彫刻	虹梁・拳鼻(唐草紋様)		

写１－20　正面

写１－21　側面

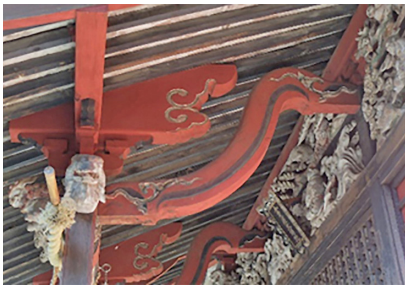


写１－22　正面 虹梁・組物

表１－７　金刀比羅宮

建造年代／根拠	文化７年(1810)／棟札	構造・形式	正面３間(3.82m)、側面１間(2.20m)、入母屋造、平入、向拝１間、鉄板葺(当初茅葺)、背面下屋１間
工匠	[大工]信州諏訪郡上桑原村 棟梁矢崎久右衛門、越後国三嶋郡道半村 白井定蔵、信州諏訪郡上桑原村 伊藤伴兵衛、越後国蒲原村 岸本庄助	基礎	切石基礎
軸部	[身舎]角柱、土台、貫、長押　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]平三斗　[向拝]平三斗
中備	なし、彫刻(後補と推測)	軒	一軒半繁垂木
妻飾	不明	柱間装置	蔀戸、板壁、彫刻(後補と推測)
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子、木階、登高欄	床	不明
天井	不明	須弥壇・厨子・宮殿	不明
塗装	朱塗、極彩色(彫刻)	飾金物等	なし
絵画	不明	材質	杉
彫刻	虹梁・手挟(唐草紋様)、木鼻(獅子・象)、向拝中備(龍)、胴羽目彫刻(花木・鳥・中国故事・他)		

写１－23　北西面



写１－24　向拝南面

写１－25　身舎隅柱上部木鼻、組物

棟梁矢崎久右衛門により拝殿の２年前に建造された。３間社側面１間、入母屋造鉄板葺（当初茅葺）平入とし１間の向拝を付け、背部に下屋を張出す。内部は身舎部が拝殿、張出し部が本殿であり、神輿型宮殿が置かれている。組物は出三斗、内法材から上部に彫刻が嵌められ、極彩色が施されている。故事、鳥・動物を題材とし、木鼻に獅子と象、水引虹梁上に丸彫の龍を付けている。

まとめ

境内には、社殿５棟、他12の末社が祀られ、背後に信仰の起源といえる巨石群も座すなど、まとまった形態を呈しており、地域における信仰の歴史をうかがうことができる。社殿、神門及び金刀比羅宮は、18世紀後期から19世紀初期の建造で、これらが群として建ち並んでいるのは貴重である。また、現在は銅板に葺き替えられているが、茅葺屋根の量感のある外観を呈していることも注目すべきことである。さらに、随所が極彩色で塗られた彫刻で覆われており、江戸後期おける神社建築の装飾化過程を知ることができる。

（岡田敦志・小池志津子・長井淳一）

【参考文献】

『前橋市史第五巻』前橋市　昭和59年
『前橋市建造物調査報告書』前橋市教育委員会　平成５年
『文化財調査報告書　第24集』前橋市教育委員会　平成６年
『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会　昭和54年

2　総社神社〔そうじゃじんじゃ〕

表２－１

神　社　名	総社神社（そうじゃじんじゃ）	所　在　地	前橋市元総社町1-31-45
旧　社　格	県社	所有者・管理者	宗教法人　総社神社
主　祭　神	磐筒男命（いわつつおのみこと）、以下５神	神　事	越年祭（１/１）、射儀式（１/６）、筒粥および置炭式（１/14）、追儺式（節分の日）、祈年祭（２/20）、春季例祭（３/15）、大祓式（６/30・12/31）、茅輪神事（６/30）、秋季例祭（10/９）、勤労感謝祭（11/23）、御神迎式（旧11/１）
創立・沿革	社伝によると、崇神天皇の頃が始まりとされ、安閑天皇元年(531)に社殿を改築し「蒼海明神」とし、860年代に上野国14郡549社を勧請合祀して「総社大明神」と改称した。『前橋市史』では、各国の総社成立時期及び上野国神名帳に記された年代等から創立は平安中期以後であろうとしている。永禄９年(1566)戦禍により社殿等を焼失し、その後宮之辺の地から現在地に移転している。明治６年(1873)に県社に列し、更に二大区及び四大区の郷社を兼ね、69町村の総鎮守であった。		
文化財指定	上野総社神社本殿(県重文　昭和38年９月)、総社神社拝殿(市重文　平成５年４月)、総社神社懸仏(県重文　昭和49年12月)、総社本上野国神名帳(県重文　昭和49年12月)、雲版(同　昭和51年５月)、総社神社の筒粥置炭式(市重無民　平成５年４月)、総社神社太々神楽(同　昭和48年９月)、総社神社の社叢けやき(市天記　平成９年４月)		

位置・配置（図２－１、写２－１）

総社神社は前橋市街地の西部で、県道足門前橋線の牛池川社橋の南に鎮座している。県道前橋安中富岡線の元総社町交差点から北へ入って元総社小学校の脇を過ぎると正面に大きな鳥居があり境内に入る参道となっている。鳥居をくぐると拝殿に向かって一直線に100ｍにも及ぶ石畳の参道がある。中ほどの石鳥居をくぐり左手の手水屋で身を浄め、右手の御篭堂、樹齢500年を超える御神木の大ケヤキ、神楽殿を過ぎると８基の石灯篭を配置した拝殿と、その奥に本殿が鎮座している。拝殿東寄りには渡り廊下を経て社務所、さらに同棟内の参集殿に連なっている。境内は市指定天然記念物の大ケヤキを始め多くの木々に囲まれて荘厳な景観となっている。

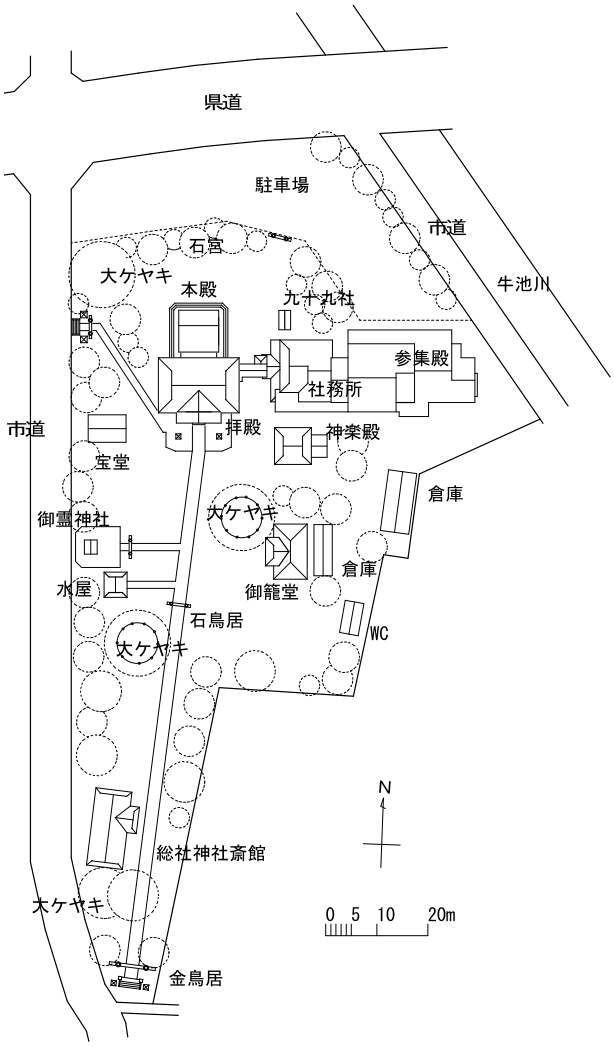


図２－１　配置図

写２－１　境内全景

由来および沿革

社伝によると、崇神天皇の頃が始まりとされ、安閑天皇元年(531)に社殿を改築して、郷名に因んで「蒼海明神」と称え郷人の崇敬を集めた。歴代の国司は当社を特に崇敬された。清和天皇（860年代）の頃に上野国内各社の神名帳を作り上野国14郡に鎮座する549社を当社に勧請合祀し社号を「総社大明

神」と称え、当社を参拝することで上野国内各社を参拝したこととして巡拝奉幣の労を省いた。『前橋市史』では、各国の総社成立時期及び総社本上野国神名帳に記された年代等から創立は平安中期以後であろうとしている。永禄９年(1566)戦禍により社殿、宝物等悉く灰燼に帰したが、神名帳及び御神鏡は難を免れた。その後宮之辺の地から現在地に移転している。明治６年(1873)に県社に列し、更に二大区及び四大区の郷社を兼ね、69町村の総鎮守であった。

本殿（ほんでん）（図２－２、表２－２、写２－２～２－７）

棟札は不明であるが、『上野總社神社史』及び『前橋市史』によれば戦禍の後元亀年間(1570～1572)に宮之辺の地から移転して再建し、元和２年

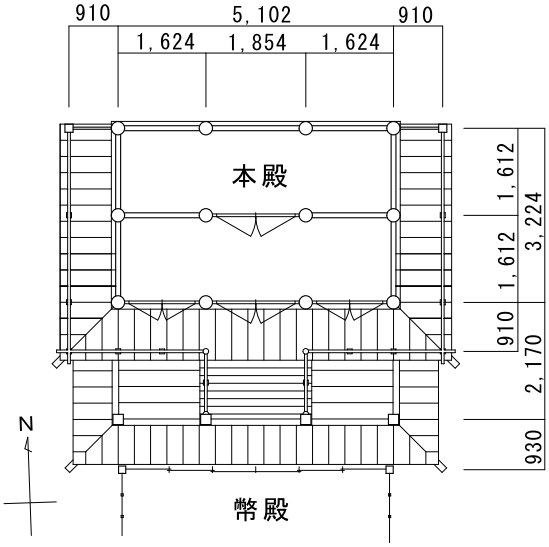


図２－２　平面図(本殿)

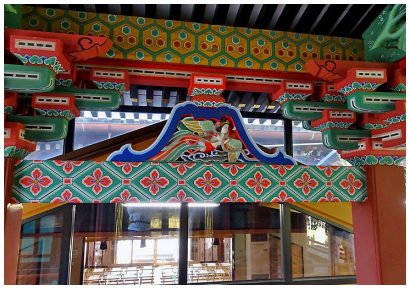
表２－２　本殿

建造年代／根拠	16世紀後期～17世紀前期／建築様式	構造・形式	三間社流造(5.10m)、側面２間(3.22m)、向拝３間、柿葺(当初草葺)
工匠	不明	基礎	基壇　切石基礎、自然石基礎
軸部	[身舎]丸柱、貫、長押　[向拝]角柱、貫、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]出組　[向拝]出組
中備	[身舎]本蟇股　[向拝]本蟇股	軒	二軒繁垂木
妻飾	虹梁大瓶束、懸魚(三花)	柱間装置	桟唐戸　板壁
縁・高欄・脇障子	大床三方切目縁、浜床、浜縁、跳高欄、脇障子(彫刻)	床	拭板張
妻天井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、極彩色(組物、虹梁、蟇股、手挟、彫刻)、金襴巻(柱)	飾金物等	木口金具、破風板廻、長押隅
絵画	外部板壁(松竹梅)、妻壁(龍、雲)	材質	不明
彫刻	[向拝]正面木鼻(象)、手挟(牡丹)、本蟇股(松・亀、迦陵頻伽、竹・鶴)　[身舎]拳鼻、本蟇股(みみずく・鳩、山鵲、波・犀、おしどり、孔雀、雉)、脇障子(老師・兎・樹木)		

写２－２　全景

写２－３　海老虹梁・組物

写２－４　妻飾



写２－５　向拝蟇股

写２－６　手挟・組物

写２－７　脇障子

(1616)に総社城主秋元泰朝によって大修理を行ったとされている。三間社流造柿葺で3間向拝を付けている。軒は二軒繁垂木とし、大床を三方として彫刻の脇障子を設けている。身舎向拝共に組物は出組で中備は本蟇股、妻飾りは虹梁大瓶束と懸魚である。塗装は建物全体に朱塗りが施されており、組物、長押及び虹梁等は極彩色である。また外壁は全面にわたって松竹梅、妻壁は龍と雲を描いた壁画になっている。彫刻は、身舎が拳鼻、本蟇股及び脇障子で向拝は木鼻、手挟及び本蟇股が設けられているが、他の神社の社殿と比較すると全体として彫刻が少ない。海老虹梁は反りが少なく、象鼻も浅い線彫りで質素である。本蟇股は内側の反転曲線を省略せずに彫り出しており外側の反転曲線も優雅である。以上のような桃山時代の特徴から本殿は16世紀後期～17世紀前期の建造と推定する。明治32年(1899)には屋根を瓦棒銅板葺に葺替え、昭和61年(1986)の保存修理で柿葺にしている。また、平成26年(2014)にも保存修理を行っている。

拝殿(はいでん)（図２－３、表２－３、写２－８～２－10）

棟札は不明であるが、『上野總社神社史』及び『前橋市史』によれば、当社氏子で宮大工棟梁　関谷出雲正平貞許、関谷出雲丞貞儀の父子により天保

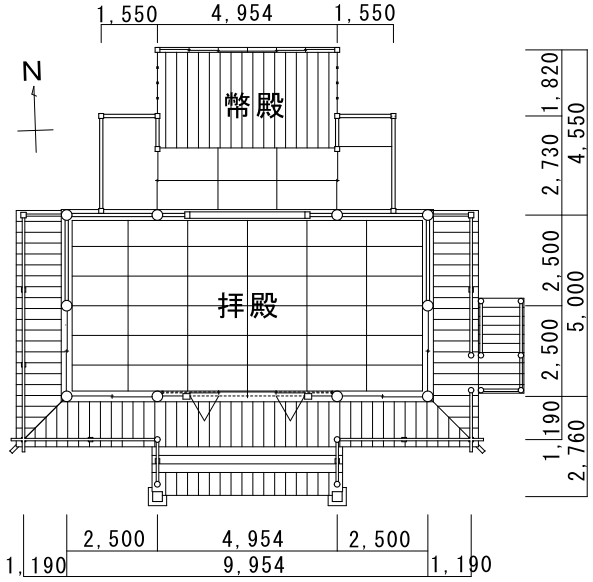


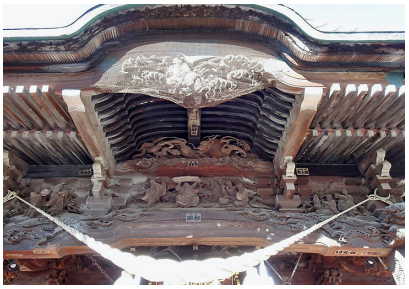
図２－３　平面図(拝殿)

表２－３　拝殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面３間(9.95m)、側面２間(5.00m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝１間軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工匠	[大工]棟梁当社氏子宮大工　関谷出雲正平貞許、関谷出雲丞貞儀　[彫工]武州熊谷宿　長谷川源四郎(社伝)	基礎	切石基礎
軸部	[身舎]丸柱、長押　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、菖蒲虹梁、手挟	組物	[身舎]二手先、出組(内部)　[向拝]平三斗、二重連
中備	[身舎]詰組　[向拝]彫刻嵌込	軒	二軒繁垂木
妻飾	虹梁大瓶束(二重)、笈形、懸魚(蕪)、兎毛通	柱間装置	桟唐戸、舞良戸、袖壁(彫刻)
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、組高欄、擬宝珠高欄、脇障子(彫刻)	床	畳敷
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗(高欄廻り)、極彩色(軒支輪)	飾金物等	桟唐戸、長押、妻破風
絵画	天井画(各種鶴の絵50枚)	材質	欅
彫刻	[身舎外部]木鼻(獅子)、虹梁(唐草絵様)、脇障子(植物と人物)、支輪(波、小動物)、建具(十二支・獅子・家紋)、袖壁(獅子の子落し)　[向拝]海老虹梁(昇龍・降龍)、水引虹梁(波の絵様)、虹梁上(天の岩戸、龍)、兎毛通(波と人物)、木鼻(獅子・獏)、手挟(葡萄・栗鼠、松・鶴)		

写２－８　全景

写２－９　海老虹梁・手挟



写２－10　水引虹梁・彫刻

14年(1843)に完成したとされている。神社明細帳には、「文化十二乙亥年(1815)ヨリ幣殿拝殿造営ヲ企テ天保十四癸卯年(1843)八月ニ至テ落成ス」とある。なお、高欄の擬宝珠には「天保三壬辰年(1832)九月吉日」の陰刻印が見られる。これらのことから19世紀前期の建造であると推定する。間口３間、奥行２間、入母屋造銅板葺（当初は茅葺）平入で正面に千鳥破風、向拝に軒唐破風を付けており、後に幣殿が増築されている。軒は二軒繁垂木、軒支輪は二重で波の彫刻に極彩色を施している。縁は切目縁を三方に廻し、人物や植物の高肉透かし彫り彫刻の入った脇障子を設けている。身舎の組物は二手先で、向拝は平三斗と菖蒲虹梁を支える組物を一体化している。内部格天井の鶴の天井画は後補のものだが、当初の格天井が宝堂に保存されており画家南洋のものと伝えられている。彫刻は身舎向拝共に随所に用いられている。特に向拝の海老虹梁（昇龍・降龍)、木鼻の獅子と獏、桟唐戸（十二支の動物）と袖壁の彫刻（獅子の子落し)、脇障子（植物と人物）等重厚で見事な彫刻作品といえる。『上野總社神社史』では、これらの彫刻は武州熊谷宿の長谷川源四郎によって彫り上げられたとされており、この彫工は妙見社本殿や榛名神社双龍門の彫工長谷川源太郎と同一人物ではないかと推測される。大正２年(1913)茅葺を柿葺に替え、昭和15年(1940)銅板に葺替えている。

まとめ

境内は、社殿を正面奥に配置し、神社入口の大鳥居から100ｍほどの石畳の参道の左右に神楽殿や御籠堂などを配置し、周囲は市指定天然記念物の大ケヤキを始め多くの木々に囲まれて荘厳な景観を見せている。明治６年(1873)には県社に列しており、県指定重要文化財で大規模な３間社の本殿や見事な彫刻が施された拝殿など、貴重な建物がその風格を保っている。また、古式を伝える祭事が多く、越年祭、弓を射てその年の雨の多少を占う射儀式、筒粥および置炭式があり、御神迎式では大釜で作った甘酒が参拝者に振舞われており、近隣では明神様として親しまれて信仰の中心となっている。

（亀井直行）

【参考文献】

『前橋市史第５巻』前橋市史編さん委員会　昭和59年
『前橋の歴史と文化財』前橋市教育委員会　昭和55年
『ビエネス第17号（群馬県文化財研究会論文報告集)』群馬県文化財研究会　平成23年
『群馬県指定文化財　上野總社神社本殿保存修理工事報告書』上野總社神社　平成26年、昭和61年
『上野總社神社史』上野総社神社　昭和57年

3　(山王)日枝神社〔(さんのう)ひえじんじゃ〕

表３－１

神　社　名	日枝神社（ひえじんじゃ）	所　在　地	前橋市山王町14-2
旧　社　格	村社	所有者・管理者	宗教法人　日枝神社
主　祭　神	大山咋命（おおやまくいのみこと）	神　事	春祭(４/第２日曜)、御神木(唐崎の杉)の手入れ(７/)、秋祭(10/17)、年越し・初詣の行事(12/31～１/１)
創立・沿革	貞観２年(860)嵯峨天皇の皇子、二品親王忠良卿が上野国太守に任ぜられたのを祝して９ケ村の郡民相集い、社殿を造り近江の国に鎮座の日吉山王大権現の神を遷祀して産土の神と仰ぎ安心立命と天下泰平五穀豊穣を祈ったのが本神社の興りである。その後応仁の乱の際に戦火に遭い、天文年間(1532～1554)に社殿のほとんどを焼失したが、永禄年間(1558～1570)に社殿を再建した。現在の社殿はこの時の建築であるという。その後前橋藩主の祭祀料によりたびたび社殿の修復をおこなう。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図３－１、写３－１）

前橋市南部の山王町に位置する。広瀬川（韮川）右岸、前橋台地の南端に広がる朝倉・広瀬古墳群の一部である文珠山古墳（４世紀前半～中葉）等が近在にあり、古くから地域の長との関係が伺える。文珠山古墳の北側の市道は、日枝神社参道として昭和８年の秋季大祭まで流鏑馬等の神事が挙行されていた。

参道の先の鳥居から境内となり、正面を東向きとし拝殿、幣殿、本殿が一直線に並び社殿を形成する。境内北側に神楽殿を備え、その裏に社務所、南側に鐘楼を配す。境内北東に厳島神社、山王天満宮、本殿西側に合祀された諏訪神社等が祀られている。

由来および沿革

創建は貞観２年(860)、嵯峨天皇の皇子二品兵部卿忠良親王が上野国太守に任ぜられたのを祝し、９カ村の郡民が社殿を造営し、近江の国日吉山王大権現の神を遷祀して、安心立命と天下泰平五穀豊穣を祈ったと伝わる。その後、応仁の乱等の戦火に遭い、天文年間(1532～1554)には社殿のほとんどを焼失し、永禄２年(1559)に社殿を再建した。江戸時代に神領54石の寄進があり、代々藩主酒井家からの祭祀料によりたびたび社殿の修復をおこなう。

写３－１　境内全景

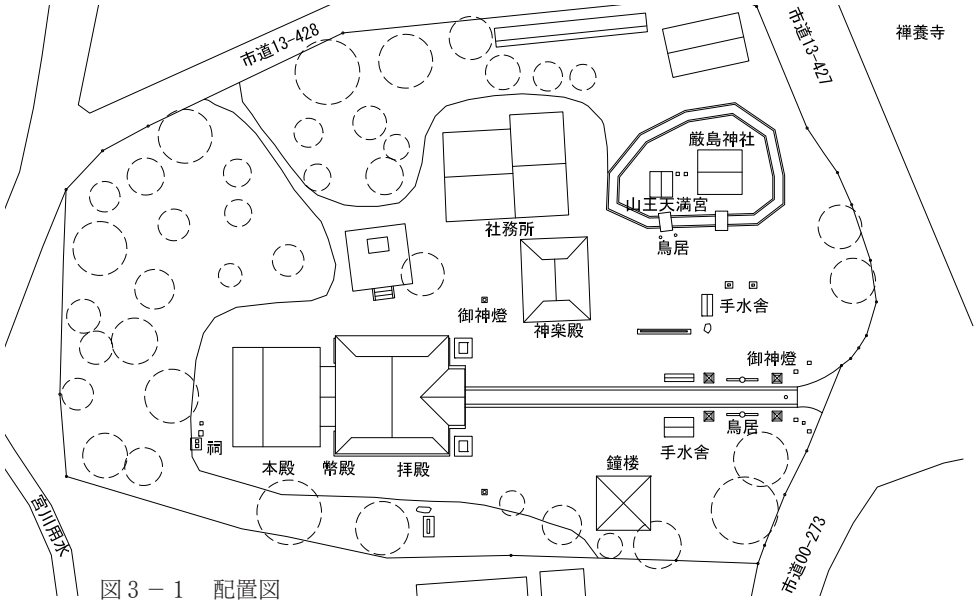


図３－１　配置図

社格は旧村社であり、春祭（４月第２日曜日、神楽）、御神木の手入れ（７月）、秋祭（10/17、昭和８年まで流鏑馬）、年越し・初詣（12/31～１/１）が神事として奉納されている。

本殿（ほんでん）（図３－２、表３－２、写３－２～３－７）

建造年代は、社伝の「上申書草稿書類綴」（県立文書館蔵）では永禄２年(1559)とあるが、身舎の木鼻や肘木の絵様（渦）を玉村八幡宮本殿身舎・向拝（慶長15年）の木鼻と比較し、その近似性を鑑みてほぼ同年代の17世紀前期の建築とする。

本殿は東面して建ち、幣殿、拝殿と一直線に連なる。三間社側面二間の流造平入で、正面に庇１間の向拝を付す。向拝の板壁・窓、身舎の火灯窓は痕跡から後補であり、向拝の妻部は落込板壁で閉じる。土台に八角形の柱を建て、地貫、腰貫、頭貫で固める。木階七級を備え、縁を三方に廻し脇障子を付す。身舎と向拝は開き板戸で区分され、身舎手前１軒を外陣、奥１間を内陣とし、一段上げた棚に御霊屋を据える。組物は正面・背面が出三斗、妻を平三斗とし、中備に蟇股を据える。妻飾りは豕扠首と束で升・棟木を受けている。側面は柱頭の出三斗、蟇股や板支輪の極彩色彫刻により華やかさを彩る。

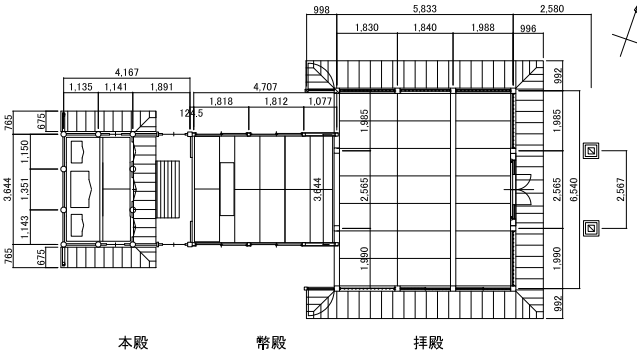


図３－２　平面図(本殿、拝殿、幣殿)

表３－２　本殿

建造年代／根拠	17世紀前期／建築様式	構造・形式	三間社流造(3.94m)、側面２間(2.33m)、向拝１間、銅板葺(当初は板葺、後茅葺、瓦葺)
工匠	不明	基礎	基壇、切石布基礎
軸部	[向拝]角柱、土台　[身舎]丸柱(床下八角形)足元・腰貫	組物	[向拝]舟肘木、出三斗、連三斗　[身舎]舟肘木、出三斗
中備	[向拝]板蟇股　[身舎]なし	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻飾	豕扠首、蕪懸魚	柱間装置	落込板扉、花頭窓(後補)
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子、浜縁、階７級	床	畳敷
天井	[向拝]化粧板天井　[身舎]屋根裏天井	須弥壇・厨子・宮殿	厨子
塗装	素木、朱塗、極彩色(出組、木鼻、支輪)	飾金物等	垂木小口、六葉
絵画	なし	材質	桧、杉、欅
彫刻	[身舎外部]木鼻(渦)　[向拝]木鼻(渦)　[身舎内部]板支輪(雲、水文、花)、実肘木(渦)		

写３－２　全景

写３－３　側面

写３－４　背面

写３－５　身舎木鼻、肘木

写３－６　向拝木鼻、肘木

写３－７　虹梁絵様(渦、若葉)

拝殿（図３－２、表３－３、写３－８～３－10）

建造年代は、社伝の「上申書草稿書類綴」より宝暦３年(1753)である。拝殿は、社殿の東面となり、正面３軒、側面３軒の入母屋造銅板瓦きで、正面に唐破風付向拝を付す。向拝水引虹梁木鼻の唐獅子と象、向拝水引虹梁上に蟇股を付す。向拝柱上の連三斗、詰組で虹梁を受け、軒唐破風の軒支輪と兎毛通、二軒繁垂木小口に飾り金物といった組み合わせにより華やかな正面となる。向拝側面の海老虹梁、手狭は向拝柱上の木鼻、蟇股、兎毛通に極彩色の彫刻が施されてより一層賑やかな装飾である。

内部天井は格天井に天井絵（後補）がある。手前１間に差鴨居が架けられ３本溝であることから、拝殿は２間に仕切られていたと推察される。柱の風蝕状況(２分程度)から200年以上の経過を推定でき、「上申書草稿書類綴」に記載の建造年代が妥当であると考えられる。

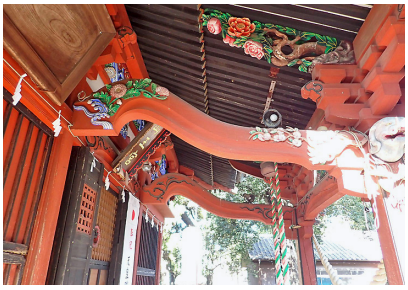
幣殿（図３－２、表３－４、写３－11～３－13）

建造年代は、拝殿と同じく、社伝の「上申書草稿書類綴」より宝暦３年(1753)である。規模は正面３間、側面３間、両下造妻入銅板葺きである。内部は

表３－３　拝殿

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面３間(6.56m)、側面３間(5.83m)、入母屋造銅板瓦葺(当初茅葺、後瓦葺)、１間向拝軒唐破風付
工匠	不明	基礎	切石独立
軸部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押、差鴨居　[向拝]角柱、木鼻	組物	[身舎]舟肘木、出三斗　[向拝]舟肘木、出三斗、連三斗、手狭
中備	[身舎]蟇股　[向拝]板蟇股、詰組	軒	二軒繁垂木
妻飾	兎毛通、虹梁大瓶束、蕪懸魚鰭付	柱間装置	諸折桟唐戸両開、蔀戸、縦舞良戸引違
縁・高欄・脇障子	三方大床、階５級、浜縁	床	畳敷
天井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	極彩色、朱塗り、極彩色(水引虹梁、木鼻、手挟)	飾金物等	小口金具、釘隠
絵画	天井絵	材質	桧、杉
彫刻	[身舎外部]虹梁(唐草絵様)、板支輪(波、花、若葉)、本蟇股(波、花、果物)、木鼻(渦)、実肘木(渦)　[向拝]水引虹梁(故事)、本蟇股(松)、木鼻(象、獅子)、兎毛通(植物)、海老虹梁(波、牡丹、唐草絵様)、手狭(牡丹)[身舎内部]虹梁(唐草絵様)		

写３－８　正面



写３－９　向拝側面

写３－10　虹梁、蟇股

表３－４　幣殿

建造年代／根拠	18世紀中期／「上申書草稿書類綴」	構造・形式	正面３間(3.60m)、側面３間(5.18m)、両下造、銅板葺(当初茅葺)
工匠	不明	基礎	切石独立
軸部	角柱	組物	なし
中備	なし	軒	一軒疎垂木
妻飾	なし	柱間装置	サッシガラス窓引違、サイディング
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷
天井	化粧屋根裏	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	桧、杉
彫刻	なし		

写３－11　側面

写３－12　側面

写３－13　内部正面

拝殿より一段上げた畳敷、化粧屋根裏である。後補により壁、建具は近代の建材に改修されている。明治34年(1901)８月「日枝神社之景」の図では「祝詞殿」と記載され、規模は当時と変わらない。

まとめ

日枝神社境内は、朝倉・広瀬古墳群の一端を構成する土地に鎮座しており、社建立以前の古代より地域社会の祈りの場として位置づけられていた。本社は神仏習合の背景から隣接の別当寺である天台宗日吉山禅養寺とともに、産土の神として信仰されてきた。明治になり神仏分離から別境内となったが、現在でも一部の神事は、神職・住職が一緒に奉納している。

社伝「上申書草稿書類綴」によれば、本殿、拝殿、幣殿は、創建から幾多の戦火により焼失してきたが、時の権力者による崇拝をうけ寄進を施され、また、比叡山の支援により社殿を復している。

日枝神社社殿は、17世紀前期から18世紀中期に建築された神社建築の典型として重要である。また、小学校校歌にうたわれ、地元の清掃により境内は常に美しく、貞観２年(860)の創建から1100年以上にわたり、氏子のみならず地域の中心的な信仰対象である。

（南雲啓二）

【参考文献】

「上申書草稿書類綴」『日枝神社文書』明治28年　群馬県立文書館蔵
『佐波郡誌（復刻版）』佐波郡役所編　昭和51年
『上野国郡村誌　14　佐波郡』群馬県文化事業振興会　昭和61年
『上野国神社明細帳　17　佐位郡・那波郡』群馬県文化事業振興会　平成20年
『大日本宝鑑　上野名蹟図誌　四巻』昭和59年
『上陽郷土記　上巻』瀬戸正弘　平成４年

11　三夜沢赤城神社〔みよさわあかぎじんじゃ〕

表11－1

神　社　名	三夜沢赤城神社（みよさわあかぎじんじゃ）	所　在　地	前橋市三夜沢町114
旧　社　格	県社	所有者・管理者	宗教法人　三夜沢赤城神社
主　祭　神	大己貴命（おおなむちのみこと）、豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）	神　事	御鎮祭（3/下午日、11/下午日）、御神幸（4/初辰日、12/初辰日）
創立・沿革	勧請年は不詳。13世紀以前は神社の存在なし。明治4(1871)年頃まで東西両社が併存し、東宮宮司は奈良原家、西宮宮司は真隅田家であった。「年代記」によると、弘治元年(1555)から永禄元年(1558)まで社殿の葺替え、惣門の新設、鳥居の建立、天正6年(1578)から天正10年(1582)にかけて各種普請を行う。本殿内宮殿は金山城主由良成重が天正18年(1590)以前に奉納したと推定される。宮殿は厨子であったと見られる。本殿、中門は明治2年(1869)11月竣工、神楽殿は昭和4年(1929)、拝殿は、昭和12年(1937)に建立された(『宮城村誌』)。		
文化財指定	三夜沢赤城神社本殿内宮殿(県重文 昭和38年9月)、三夜沢赤城神社本殿並びに中門(昭和48年4月)、赤城神社惣門(昭和53年8月)、三夜沢赤城神社の古文書45通(県重文 昭和48年4月)、三夜沢赤城神社のたわらスギ(県天記 昭和48年4月)、赤城神社境内神代文字の碑(市重文 昭和53年4月)、三夜沢赤城神社の宝塔(市重文 昭和53年4月)、三夜沢赤城神社の太々神楽(市重無民 昭和60年7月)、櫃石(県史跡 昭和38年9月)、三夜沢のブナ(市天記 昭和55年4月)		

位置・配置（図11－1、写11－1）

三夜沢赤城神社は前橋市北部の三夜沢町に位置する。赤城山南麓、県道大胡赤城線に沿う参道松並木約3㎞のぼると大鳥居に至る。境内の大鳥居をくぐり、両脇に歴代の石造物が並ぶ参道の数段高い平地には拝殿、幣殿、その西に神楽殿が建つ。拝殿から真北方向に振れてさらに一段高い平地に瑞垣付の中門、本殿を配す。瑞垣・玉垣は中門から本殿を囲むように延長60m余りのび、外界と区画する。

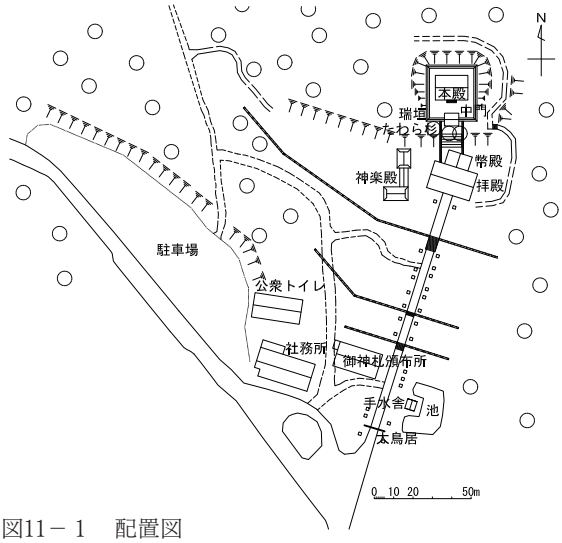


図11－1　配置図

写11－1　境内全景

由来および沿革

勧請年は不詳で、13世紀以前は神社の存在ない。「年代記」によると、弘治元年(1555)から永禄元年(1558)まで社殿の葺替え、惣門の新設、鳥居の建立、天正6年(1578)から天正10年(1582)にかけて各種普請を行う。明治4年(1871)頃までは東西両宮が併存し、東宮宮司は奈良原家、西宮宮司は真隅田家であった。本殿内宮殿は、金山城主由良成重が天正18年(1590)以前に奉納したとされ、東西両宮併存の頃の西宮に属していたものといわれる。西宮は勢多郡、佐波郡、新田郡地域の人々の信仰を集めていた

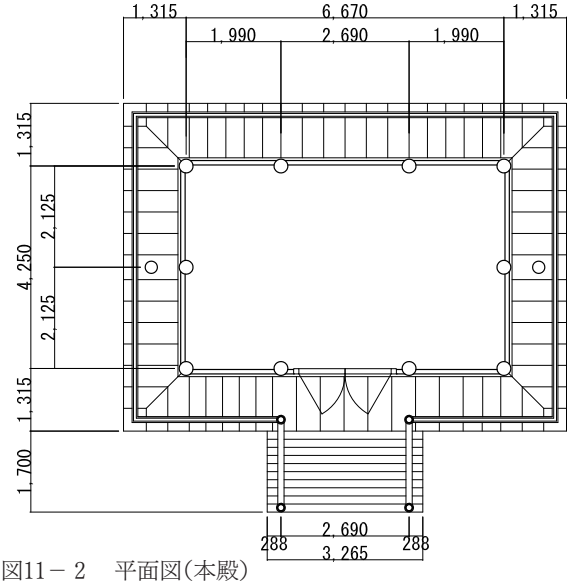


図11－2　平面図(本殿)

といわれる。由良成重は赤城信仰の篤かった武将のため、宮殿（扉裏面に「源成重寄納」の墨書銘）を奉納したと伝わる。

本殿、中門は明治２年(1869)11月竣工、神楽殿は昭和４年(1929)、拝殿は昭和12年(1937)に再建された。

本殿（ほんでん）（図11－２、表11－２、写11－２～11－７）

本殿の木取り始めは慶応４年(1868)２月、上棟は明治元年(1868)11月、竣工が明治２年(1869)11月である。本殿棟札には、［棟梁］森山内匠茂範、［小工］兵造、桂八、茂作、榮七、助造、澤吉、竹杢、友吉［仙］政右衛門、政吉、萬助、音吉、長吉の名前が記されている。

規模は正面３間（6.67m）、側面２間（4.25m）の神明造で棟持柱を立て、屋根は銅板葺とする。大棟に勝男木（８本）、千木などを付け、破風拝みに鞭掛が左右４本ずつ突き出ている。切石礎石に土台を廻し八角形柱を建て、縁の束は礎石に掘立である。四方に刎高欄付切目縁を廻し、正面中央に擬宝珠登高欄付の木階10級が付く。

丸柱に切目長押、内法長押、頭貫で固め桁を廻す。豕扠首と棟持柱で棟木を支える。柱間装置は正面中央間を板扉とし、その他側面・背面を横羽目の板壁とする。組物、彩色はないが、飾り金物は勝男木、千木、鞭掛、垂木小口、釘隠、擬宝珠、扉金具に採用され、華美な装飾はないが、品格を保っている。

本殿内宮殿は、今回調査できなかったが、赤城神社が東西両宮に分かれていた頃、西宮に属していた。西宮は勢多郡および新田郡地域の信仰を集めていた。金山城主由良成繁は赤城信仰に篤い武将であったが、宮殿の扉裏面に「源成重寄進」の墨書があり、成重の奉納と認められる。

表11－２　本殿

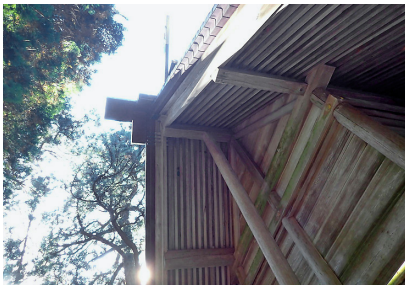
建造年代／根拠	明治２年(1869)／棟札、年代記	構造・形式	三間社神明造(6.67m)、側面２間(4.25m)、銅板葺
工匠	〔大工〕棟梁 森山内匠茂範　小工 兵造、桂八、茂作、榮七、助造、澤吉、竹杢、友吉 仙 政右衛門、政吉、萬助、音吉、長吉	基礎	切石坪基礎、土台
軸部	丸柱、切目長押、内法長押、腰貫	組物	なし
中備	なし	軒	［正面］二軒繁垂木　［背面］二軒繁垂木
妻飾	豕扠首、鞭掛	柱間装置	［正面］板扉　［側面・背面］横羽目板壁
縁・高欄・脇障子	四方刎高欄付切目縁、登高欄、木階10級	床	不明(調査不可)
天井	不明(調査不可)	須弥壇・厨子・宮殿	不明(調査不可)
塗装	素木	飾金物等	鰹木、千木
絵画	なし	材質	欅、桧、杉
彫刻	なし		

写11－２　全景

写11－３　側面

写11－４　背面

写11－５　土台、八角形柱


写11－６　棟持柱

写11－７　縁、刎高欄

宮殿の建造年代は天正初年頃（16世紀後半）と伝わる。組物、柱、桟、唐戸、軒廻り等禅宗様を基本とし、小建築ではあるが室町末期の様式を伝える貴重な建築である。

中門（なかもん）（図11－３、表11－３、写11－８～11－10）

中門の建造年代は、本殿と同じく明治２年(1869)２月である。規模は、１間１戸四脚門、正面１間(2.79m)、側面２間（2.08m）の切妻造平入である。屋根は銅板葺とし、大棟に勝男木（６本)、千木などを付ける。両袖に瑞垣が付き、本殿を囲み玉垣となって一周する。玉垣・瑞垣内には立入できない聖なる地となっている。

自然石礎石に丸柱を建て、腰貫、飛貫、桁を通し、冠木、丸桁で固める。桁に束を建て棟木を支える。

組物、妻飾はなく全体的に簡素な造りとなっている。

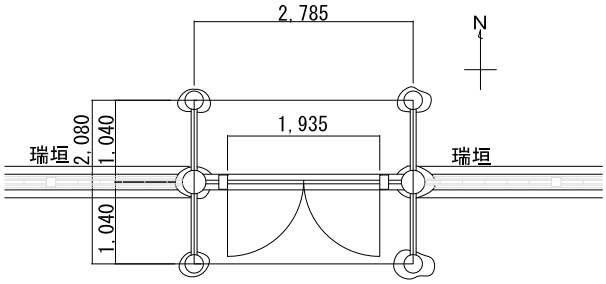


図11－３　平面図(中門)

中門の前に県天然記念物「三夜沢赤城神社のたわらスギ」が３本生えている。

惣門（そうもん）（図11－４、表11－４、写11－11～11－13）

「年代記」に宝暦元年(1751)４月「今年四月惣門造立願主月田村源四郎建立大工田面村五郎左衛門月田村与七棟梁ナリ」とあり、これを建造年代とする。また、「赤城神社惣門の群馬県指定重要文化財指定に関する意見書」（持田照夫）によれば、「江戸時代中期、それも武士に信仰された門の形の俤を残している。」と記述されている。

正面１間（3.54m)、側面２間（2.27m）の１間

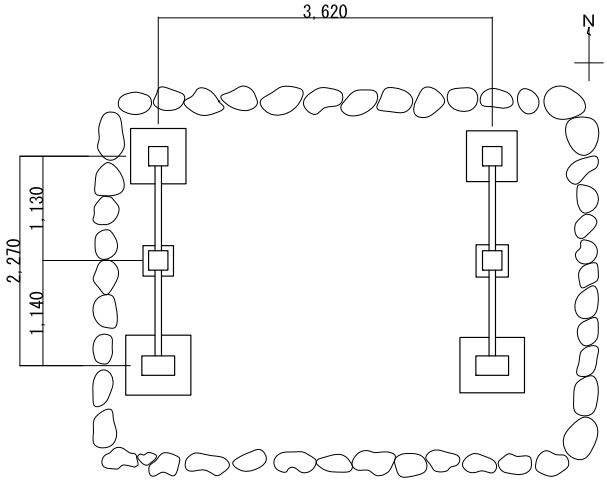


図11－４　平面図(惣門)

表11－３　中門

建造年代／根拠	明治２年竣工／年代記	構造・形式	１間１戸四脚門(2.79m)、側面２間(2.08m)、切妻造、平入、銅板葺、両袖端瑞垣
工匠	不詳	基礎	自然石基礎
軸部	丸柱、腰貫、飛貫	組物	なし
中備	なし	軒	一間繁垂木
妻飾	なし	柱間装置	なし
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	なし	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	欅、桧、杉
彫刻	なし		

写11－８　正面

写11－９　側面

写11－10　軸部

表11－4　惣門

建造年代／根拠	宝暦元年(1751)／年代記	構造・形式	1間1戸高麗門(3.54m)、側面2間(2.27m)、切妻造、平入、銅板葺き
工匠	[大工]田面村五郎左衛門　棟梁月田村与七／年代記	基礎	自然石積基壇、切石基礎
軸部	角柱、腰貫	組物	二重肘木、平三斗
中備	大瓶束	軒	一軒疎垂木
妻飾	なし	柱間装置	なし
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天井	化粧母屋、化粧棟木	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明
彫刻	虹梁、木鼻、大瓶束、二重肘木		

写11－11　正面

写11－12　側面

写11－13　虹梁、大瓶束

1戸四脚門である。切妻造銅板葺平入の高麗門で南面して建つ。扉があった痕跡はなく、鳥居型の高麗門と考えられる。

自然石積基壇の切石に角柱を建て、腰貫、飛貫、虹梁で固め、本柱で直接棟木を支える。本柱の二重肘木で化粧母屋を受け、虹梁中備に大瓶束、二重肘木、平三斗、肘木で棟木を受ける。虹梁（渦、若葉）、木鼻（象）、肘木の絵様（渦）は、単純で17世紀末から18世紀の特徴を表している。

まとめ

三夜沢赤城神社は、県内はもとより関東平野一円にその分社が約300社あるといわれる赤城神社の本社の一つである。文献によれば、赤城神社の本社は歴史的に三夜沢赤城神社、二宮赤城神社、大洞赤城神社の3社で争ってきた。いまだ確定はしていないが、江戸時代以降は三夜沢赤城神社が本社とみなされている。

二宮赤城神社との間には現在も続く「御神幸」の神事が年2回おこなわれており、歴史的関係性が深い。本社の北西には櫃石と呼ばれる巨石（長径5.10m、短径3.10m、高さ2.50m）があり、上代の赤城信仰祭祀場（磐座）と考えられている。

三夜沢赤城神社本殿は、復古神道の代表的建物で、県下最大級の大きさであり、用材にもすぐれている。幕末に火災にあい、明治初年に完成したものであるが、神社建築で県重要文化財に指定されたのは、当時の神仏分離、復古神道の影響の下に再建されたものとして、地方におけるこれらの運動を理解するうえで貴重な建築物であるからである。

（南雲啓二）

【参考文献】

『重文第67号群馬県指定重要文化財指定書』群馬県教育委員会　昭和38年
『重文第112号群馬県指定重要文化財指定書』群馬県教育委員会　昭和48年
『重文第143号群馬県指定重要文化財指定書』群馬県教育委員会　昭和53年
『教材 群馬の文化財3－近世・近代・民俗編－』群馬県教育委員会　昭和57年
『宮城村誌』宮城村誌編集委員会　昭和48年
『宮城村躍進の百年 村制施行百周年記念写真集』宮城村企画課　平成元年
『大日本名蹟図誌 上野国之部 第八編』名古屋光彰館　明治35年
『御大禮群馬縣勢多郡神社誌』群馬縣神職會勢多郡支部　大正5年
『群馬の古建築』村田敬一　平成14年

13　伊勢崎神社〔いせさきじんじゃ〕

表13－1

神　社　名	伊勢崎神社（いせさきじんじゃ）	所　在　地	伊勢崎市本町21-1
旧　社　格	県社	所有者・管理者	宗教法人　伊勢崎神社
主　祭　神	宇気母智命（うけもちのみこと）	神　事	春季例祭（４/15）、八坂天王祭（８月第一土・日曜）、例大祭(10/17)、えびす講祭(11/19、20)
創立・沿革	建保元年(1213)三浦介義澄が創建、この地の鎮守神となる。時の領主等により整備・修理が行われ、さらに寛永期の酒井忠行以降は、城主の修理するところとなる。明治42年周辺36社合祀、大正15年飯福神社から伊勢崎神社に改称した(『伊勢崎の寺社建築』、『伊勢崎佐波の神社誌』)		
文化財指定	なし		

位置・配置（図13－１、写13－１）

伊勢崎市の旧市街地、東西に走る本町通りから一筋南に位置する。境内地は東西に長い長方形の矩形で、東を正式な出入口として石製鳥居を建て、西に参道を進むと拝殿が東面して建つ。参道右手に社務所、参集殿、左手に手水舎、神楽殿を配する。また南と西にも石製鳥居を建て、西の鳥居は元文２年(1737)に建てられた古い物である。境内には欅や銀杏の巨木が建ち、長い信仰の営みを伝える。

由来および沿革

建保元年(1213)三浦介義澄が創建し、この地の鎮守神となる。創建当時の社地は不明だが、元徳元年(1329)国司の新田義貞が現在の地に移し、社殿を修理した。天正18年(1590)には由良信濃守が修理を加え、慶長年間(1596～1615)には稲垣長茂の営繕によって祭祀が行われるようになった。寛永14年(1637)酒井河内守忠行は奉幣式を執行、以来城主の修理するところとなる。明治42年(1909)周辺36社合祀、大正15年(1926)稲荷神社を合祀し、飯福神社から伊勢崎神社に改称した（『伊勢崎の社寺建築』、『伊勢崎佐波の神社誌』より）。

写13－１　境内全景

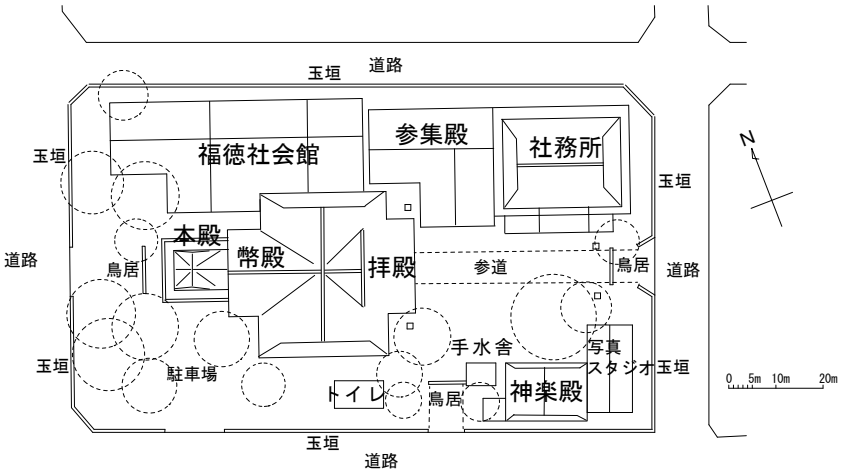


図13－１　配置図

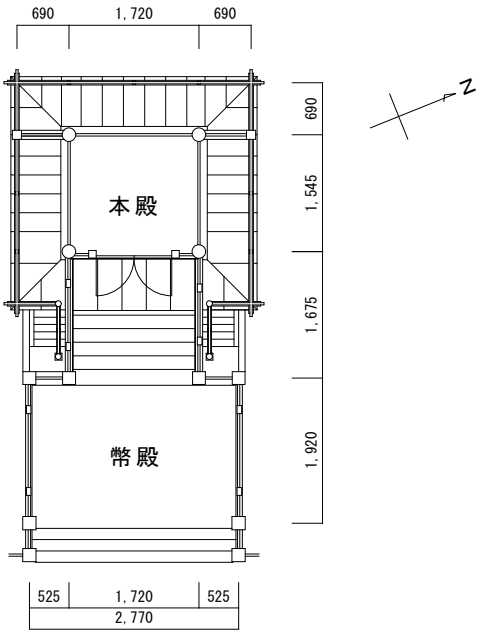


図13－２　平面図(本殿)

本殿（図13－２、表13－２、写13－２～13－７）

当社には嘉永元年(1848)再建の棟札と祈祷札、そして慶応３年(1867)修覆の棟札を残す。高い基壇上に建てられ、海老虹梁は段差や反りが大きく、絵様は浮彫彫刻となり、またあらゆる部材に彫刻が施され、建物全体が彫刻化した設えおよび素木造から、棟札の年代が妥当と考える。当棟札（本編資料編234頁参照）では棟梁は小此木村の内田庄五郎藤原祐昌等を記す他に、彫方として上州花輪宿の石原常八郎と石原常次郎等を記す。この石原常八郎は、妻沼聖天山本殿の彫刻棟梁を務めたと言われる石原吟八郎の弟子石原常八の２代目である。なお背面軒唐破風の兎毛通裏面に刻銘があり、木彫工として東都日本橋の後藤三次橘恒徳を記すが、どのように仕事を受持ったかは不明である。さらに慶応３年(1867)の棟札では、再建より19年後の修築を伝え、その範

表13－２　本殿

建造年代／根拠	嘉永元年(1848)／棟札	構造・形式	一間社流造、向拝１間軒唐破風付、背面軒唐破風付、銅瓦葺、正面１間(1.72m)、側面１間(1.54m)
工匠	[大工]棟梁　内田庄五郎藤原裕昌(小此木村)他、脇棟梁　武正上総之助源儀春(武州本庄駅)他、[彫工]彫方　石原常八郎、石原常次郎(上州花輪宿)他(棟札)、[彫工]木彫工　後藤三次橘恒徳(墨書)	基礎	切石基壇の上石製亀腹
軸部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老紅梁	組物	[身舎外部]三手先　[身舎内部]不明　[腰組]三手先　[向拝]拳鼻付出連三斗積上変形、手挟
中備	[身舎外部]詰組　[身舎内部]不明　[向拝]嵌込彫刻	軒	[正面]打越二軒繁垂木、並行、板支輪(彫刻) [背面]二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻飾	二重虹梁大瓶束笈形付、鏑懸魚鰭付	柱間装置	[正面]飾金物付桟唐戸、両脇板壁 [側背面]板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁組高欄、登高欄、脇障子(彫刻)	床	拭板(既往報告書による)
天井	格天井(既往報告書による)	須弥壇・厨子・宮殿	不明
塗装	素木造、金地に黒(彫刻神獣の口：朱、目)	飾金物等	桟唐戸、向拝正面茅負、長押端部(入八双金物)、肘木・尾垂木・垂木等木口金物
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎外部]軸部(地紋彫)、腰羽目(唐獅子、波に麒麟、竹林の虎、瀧に鷹)、胴羽目、彫刻板支輪(波)、組物間(龍、雉、鶴、鶏、小鳥)、木鼻(獅子)、尾垂木(象)、虹梁(唐草絵様)、脇障子(龍、鳳凰、孔雀)　[向拝]水引虹梁(唐草絵様)、中備(亀に仙人)、正面木鼻(獅子)、兎毛通(麒麟)、妻飾(花に鳥)		

写13－２　側面

写13－３　向拝正面

写13－４　身舎正面

写13－５　向拝側面

写13－６　身舎妻飾

写13－７　身舎腰羽目

囲は定かではなく、手の込んだ本殿手前１間の幣殿の修築とも考えられるが、確定出来る資料はない。この棟札に大工棟梁として弥勒寺音次郎が記され、石原常八郎等と合わせ、上州花輪系の工匠が携わっていることがわかる。

建物は一間社流造銅瓦葺で正面と背面に軒唐破風を付け、大棟に千木と堅魚木を載せる。切石基壇を高く積み、土台を敷き丸柱を建て長押、頭貫で固める。組物は腰組ともに拳鼻付三手先の豪華な造りとし、中備は詰組で一部通り肘木を連続する小斗で受ける。軒は二軒繁垂木で、妻飾は二重虹梁大瓶束に流水形笈形を付け上段虹梁を二手先組物で支える。

軸組材のほぼ全てに紗綾紋等の地紋彫、および唐草絵様が施され、頭貫は龍の浮彫とする。彫刻は木鼻の獅子と籠彫の牡丹、兎毛通の麒麟に始まり、腰・胴羽目、中備、妻飾の全てに彫りの深い透彫彫刻を嵌め込み、板支輪も丸彫に近い透彫である。建物は彫刻で埋め尽くされ、一つの彫刻作品の様相を呈している。

まとめ

鎌倉時代に創建された当社は、時の領主により修理等が行われ、江戸時代も城主による修理修築が続いた城下の鎮守社である。嘉永元年(1848)以前の造りはわからないが、現在の本殿は、切石基壇を高く積み多様な彫刻が嵌め込まれた腰羽目部分に目線を誘う。軸組材のほぼ全てに地紋彫が施され、ほぼ全ての部材間に彫りの深い透彫彫刻が嵌め込まれている。素木造によるその造形は幕末期の神社建築の特性を見事に伝えている。また再建及び修覆時に、上州花輪系の工匠（彫物師）が携わっており、彫刻そのものの見事さと合わせて、その足跡を辿る上でも貴重な建築である。

（栗原昭矩）

【参考文献】

『伊勢崎の社寺建築』伊勢崎市　昭和58年
『伊勢崎佐波の神社誌』群馬県神社庁伊勢崎佐波支部　令和２年

14　(柴)八幡神社〔(しば)はちまんじんじゃ〕

表14－1

神　社　名	八幡神社(はちまんじんじゃ)	所　在　地	伊勢崎市柴町693
旧　社　格	村社	所有者・管理者	宗教法人　八幡神社
主　祭　神	誉田別命(ほんだわけのみこと)	神　事	節分祭(2/3)、八十八夜祭(泉龍寺の稲含社の養蚕発展の祈願祭と共に行う5/2(閏年は5/1))
創立・沿革	源頼義が奥州征伐の途中に渡舟の際に柴村で休息され八旗の森という地名に因み、八幡大臣へ祈願をかけ賊徒を退治した。その帰途には世子八幡太郎義家と共に社殿を造営し、八幡大臣を山城国男山石清水から勧請奉斎し、康平6年(1063)初領10万を寄進されたのを起源とする。明治40年、5社を合祀、柴根神社と称したが大正6年、旧に復し八幡神社とし、現在に至る(『伊勢崎佐波の神社誌』より)。		
文化財指定	柴町八幡神社社殿(市重文　平成16年11月)		

位置・配置（図14－1、写14－1）

伊勢崎市の西端部、玉村町方面から利根川にかかる五料橋を渡り柴町交差点の東、街道の北側に参道入り口を開く。旧日光例幣使街道の柴宿に位置している。街道より参道を北に進むと、参道両側に多数の庚申塔があり、石橋のなごりと手水舎がある。参道正面に拝殿、幣殿、本殿を配し、これら社殿は敷地東寄りである。社殿の北西に神明宮、北東に稲荷社が置かれる。社殿の北側に多数の石宮がある。社殿の南東部に神楽殿、その東に土俵を配す。敷地北東部には集会所、社務所、南東部には遊具がある。樹木は敷地周囲に植えられている。なお旧社地は天明3年(1783)浅間山噴火の際残らず泥入りとなり、その後文政年間(1818～1830)には利根川洪水により

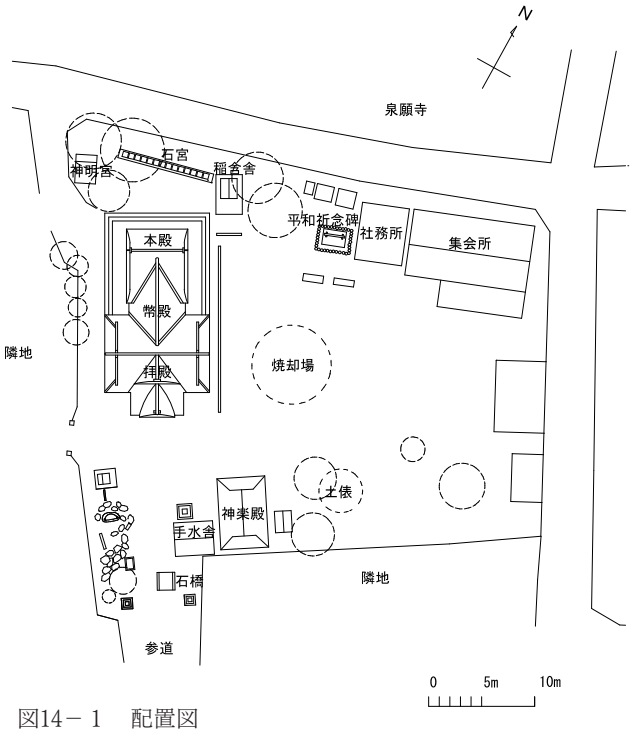


図14－1　配置図

写14－1　境内全景

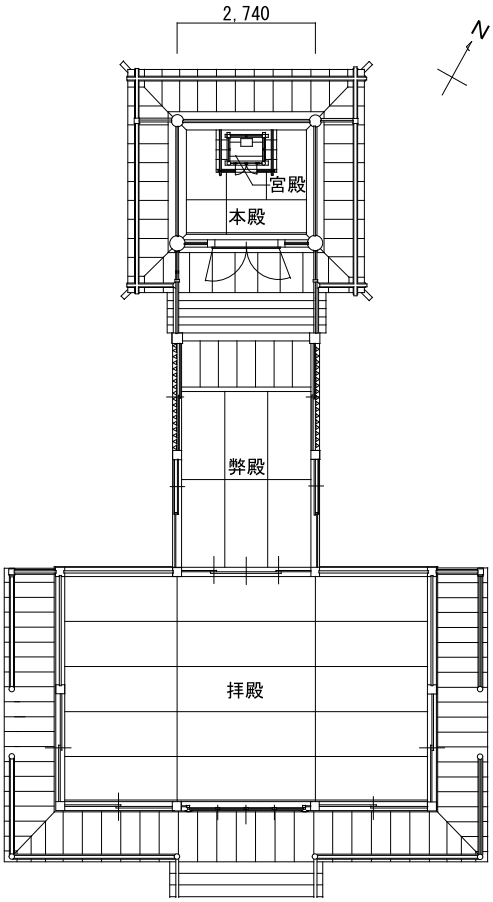


図14－2　平面図(社殿)

被害を受けるなどし、３度の曳家により現在の位置に遷座したものとみられる。

由来および沿革

源頼義が奥州征伐の途中に柴村で休息された際、八旗の森という地名に因み八幡大臣へ戦勝を祈願した。その帰途に世子八幡太郎義家と共に康平６年(1063)社殿を造営し、八幡大臣を山城国（現京都府）男山石清水から勧請奉斎し、社領10石を寄進されたのを起源とする。翌年８月中御冷泉院御辰筆「八幡大神」の神号額を賜ったが、元亀年間(1570～1573)に兵火のため焼失。慶長18年(1613)前橋藩主酒井雅楽頭忠世により再建され、更にその世子忠行が大阪の陣で戦功をあげ益々修理が加えられた。その後伊勢崎藩主酒井氏により社殿の営繕がなされた。明治40年(1907)、菅原神社、琴平神社、秋葉神社、水神神社、火雷神社を合祀、柴根神社と称したが大正６年(1917)、旧に復し八幡神社とし、現在に至る。また明治４年(1871)、近隣に式台社が多く、郷社格のところ村社となっている。

本殿（ほんでん）（図14－２、表14－２、写14－２～14－７）

平面は一間社流造で１間の向拝を持ち、四方切目縁に板脇障子を立て、比較的中規模である。当初は檜皮葺であったが大正10年(1921)銅板葺きに、昭和62年(1987)に鉄板瓦に改修されている。また本殿内部には小規模な宮殿が置かれている。身舎の基礎は自然石の切石であるが、縁の束石には浅間山泥流に

表14－２　本殿

建造年代／根拠	17世紀末期～18世紀初期／建築様式	構造・形式	一間社流造(2.73m)、側面１間(2.45m)、向拝１間、鉄板葺(当初檜皮葺)
工匠	[大工]大工棟梁　林兵庫(改修)	基礎	自然石(一部切石)
軸部	[身舎]丸柱、土台、虹梁、貫、長押、台輪　[向拝]角柱、虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]平三斗、四隅出組　[向拝]連三斗
中備	[身舎外部]本蟇股　[向拝]本蟇股	軒	二軒繁垂木
妻飾	虹梁豕扠首、蕪懸魚	柱間装置	板扉、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁脇障子、擬宝珠、登高欄付、組高欄	床	拭板張
天井	竿縁	須弥壇・厨子・宮殿	宮殿あり
塗装	朱塗、墨塗(向拝・正面蟇股)	飾金物等	隅金具(板扉)、釘隠(六葉)
絵画	なし	材質	不明
彫刻	[身舎]蟇股(正面鳥に松、東面梅に鶯、北面菖蒲、西面梅に鶯)、木鼻(渦)　[向拝]水引虹梁(唐草絵様)、海老虹梁(唐草絵)、蟇股(蝶に牡丹)、木鼻(渦)		

写14－２　全景

写14－３　妻飾

写14－４　海老虹梁

写14－５　向拝正面

写14－６　向拝内側

写14－７　本殿内部

よる赤石を置き、納りの悪いところから曳家などによる修復の跡がうかがえる。土台は切石の上に井桁に組まれている。組物は向拝は三斗組、身舎は連三斗とし、中備は本蟇股で外周部のそれは肩も張り背も高く古風である。彫刻は蟇股の中に見られる位であり、妻飾りは束立豕扠首とし全体的に簡素な造である。建造年を直接記すものはないが、享保10年(1725)遷宮の棟札により、17世紀末～18世紀初期に建築されたものと考えられる。向拝や身舎正面の蟇股や虹梁の唐草様、海老虹梁がやや段差を付けて架けられていることからも推定できる。明治16年の調査の際に慶長18年(1613)建築との鑑定を得ているが細部意匠よりこれには無理があると思われる。安永７年(1778)の棟札には再興とあり屋根と土台の入替を行っているが、大工棟梁の名に歓喜院聖天堂を手がけた武州の林兵庫の名が見られる。本殿床下南西の隅柱にも「大工棟梁妻沼林兵庫正作」の墨書きが残るが今回は確認出来ていない。また天明３年(1783)の曳家の様子も本殿床下に墨書きで残されている。

拝殿（はいでん）（図14－２、表14－３、写14－８～14－10）

正面３間、側面２間の入母屋造鉄板瓦葺平入で正面に１間の向拝を建てる。三方に切目縁を廻し板脇障子を建てる。正面に千鳥破風、向拝に軒唐破風を付ける。虹梁の絵様は装飾が進み眉の彫は深く、海老虹梁は反り段差をつけて架けられている。向拝手挟、木鼻、軒唐破風の彫刻は丸彫、透し彫などで精

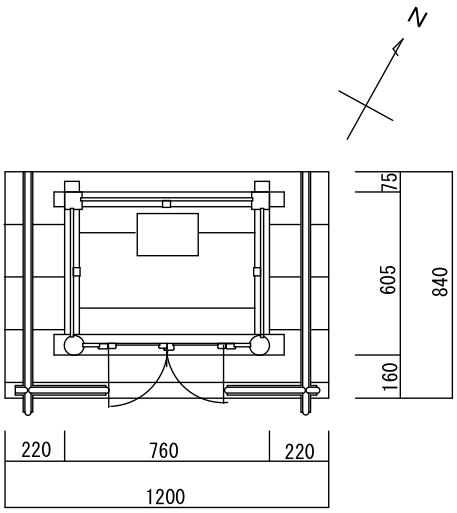


図14－３　平面図(宮殿)

表14－３　拝殿

建造年代／根拠	寛政９年(1797)／棟札	構造・形式	正面３間(7.50m)、側面２間(4.68m)、入母屋造、千鳥破風付、平入、向拝１間軒唐破風付、鉄板瓦葺
工匠	不明	基礎	[身舎]自然石切石　[向拝]楚盤
軸部	[身舎]角柱、土台、貫、長押　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組物	[身舎]平三斗、四隅：三斗組　[向拝]連三斗
中備	[身舎]本蟇股　[向拝]嵌込彫刻	軒	[身舎]一軒繁垂木　[向拝]打越二軒繁垂木、茨垂木
妻飾	[身舎]虹梁、蕪懸魚(妻)、虹梁、蕪懸魚(千鳥破風)	柱間装置	[正面]桟唐戸、引違板戸　[側面]引違板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁板脇障子、擬宝珠高欄	床	畳敷
天井	ジプトーン(以前は格天井に天井絵)	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗、墨塗(内部蟇股)	飾金物等	小口金具、桟唐戸(隅金具、辻金具)
絵画	天井絵(鈴木不求・春山・松山)(現在は神楽殿に保管)	材質	不明
彫刻	[身舎]蟇股(南：鳥、鳥に松、西：牡丹に鳥、木蒐、東：木蒐、鳥、北：菖蒲に水鳥、鳥)　[向拝]兎毛通(雲に麒麟)、唐破風(波・老人・松)、中備(龍)、水引虹梁(唐草絵様)、海老虹梁(梅)、木鼻(正面獅子・側面獏)、手挟(牡丹)		

写14－８　南西面

写14－９　海老虹梁と組物

写14－10　内部組物

巧に彫られている。蟇股は足が長く反らず、内部の彫刻は板よりはみ出ている。以上の特徴から建造年は本殿より後の18世紀後期の様式を表しており、その頃の棟札には安永７年(1778)と寛政９年(1797)棟札が残されている。安永７年の棟札は屋根と土台の入替であり本殿の改修のものと思われ、再興の文字のある寛政９年の建築とみるのが妥当である。内部の天井には伊勢崎藩御用絵師の鈴木不求（狩野良信)、春山（狩野義直)、松山（柳繁軒春甫）の親子三代にわたる84枚の墨絵が嵌込まれていたが現在は神楽殿に大切に保管されている。これらの天井絵も建造年頃の作と思われる。

幣殿（図14－２、表14－４、写14－11～14－13）

建造年は、拝殿意匠と酷似している点から拝殿と同時期の寛政９年(1797)とみられる。正面１間、側面２間の両下造金属瓦葺で床は拭板の上に畳敷となっている。軸組は自然石の上に角柱が立てられ、切目長押、内法長押、頭貫、台輪となり、組物は平三斗である。中備は外部は本蟇股で鳥に植物の彫刻が嵌込まれており、内部は撥束となっている。

宮殿（図14－３、表14－５、写14－14～14－16）

本殿奥に小さな宮殿が置かれている。平面は、正面１間側面１間の切妻造柿葺妻入で、木製台座の上

表14－４　幣殿

建造年代／根拠	寛政９年(1797)／意匠から拝殿と同時期	構造・形式	正面１間(2.73m)、側面３間(4.65m)、両下造、鉄板瓦葺
工匠	不明	基礎	自然石
軸部	角柱、長押、貫、台輪、土台なし	組物	平三斗
中備	[外部]蟇股　[内部]撥束	軒	一軒繁垂木
妻飾	なし	柱間装置	引違板戸、板壁、明り障子
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷
天井	ジプトーン	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱塗	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明
彫刻	蟇股(花、植物に鳥)		

写14－11　内部

写14－12　内部中備

写14－13　外部組物

表14－５　宮殿

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	一間社切妻造(0.76m)、側面１間(0.60m)、妻入、柿葺
工匠	不明	基礎	木製台座
軸部	[台座]土台(井桁組)、角柱　[宮殿]土台(井桁組)、正面丸柱、背面角柱	組物	変形出三斗
中備	なし	軒	一軒繁垂木
妻飾	虹梁束立、懸魚(紛失)	柱間装置	[正面]桟唐戸　[側背面]板壁
縁・高覧・脇障子	台座の上面板、組高欄	床	拭板
天井	化粧屋根裏	須弥壇・厨子・宮殿	厨子あり
塗装	春慶塗(外部)、墨塗(箱棟、鬼板)、素木(内部)	飾金物等	なし
絵画	なし	材質	不明
彫刻	木鼻(渦)、虹梁(渦)		

写14－14　全景

写14－15　正面細部

写14－16　内部

に面板を置き三方に組高欄を廻す。土台は井桁に組まれ、丸柱を立て虹梁、頭貫で軸組を構成する。組物は正面のみ変形連三斗である。虹梁の絵様は簡素であるが、彫刻の手は荒い。屋根は柿で丁寧に葺かれており、垂木も放射状に四方面となっている。外部は木目を生かした春慶塗が施されている。内部に２つの厨子を安置しておりそれぞれ元禄10年(1679)、元文４年(1739)の墨書きがある。建造年を示す資料がないが、少なくとも本社最古の扁額の延宝７年(1697)までは遡らないと伝えている。様式からみて享保10年(1725)の社殿修理前後、18世紀前期の制作と考えられる。しかし、修復の跡も見られる。今後の検討が望まれる。保存状態は良く、社殿とともに貴重な文化財である。

まとめ

本遺構は、８枚の棟札と３枚の扁額、数か所の墨書により、修理、遷宮の記録や曳家の記録などが残されており、史料として貴重である。またそれにより、伊勢崎藩主酒井氏や氏子により修復され、大切に保存され、地域の人々の信仰を集めてきたことがうかがえる。またその修復は日光例幣使街道の発展とともに行われてきており、現在も参道から境内地に至るまでその名残をとどめている。本殿は17世紀後期～18世紀初期の建築様式を伝えるものとして、拝殿、幣殿は18世紀後期の建築様式を表すものとして貴重であり、宮殿は保存状態もよく地域文化財としての価値は高い。また棟札や本殿床下に武州妻沼の大工林兵庫の名が残されている事も注目すべきである。更に社殿は天明３年(1783)の浅間山噴火による泥押しや利根川氾濫の被害による曳家の記録や修復の様子を表す建物として貴重である。

（角倉ゆき枝）

【参考文献】

『伊勢崎市史建造物調査報告書第二集　伊勢崎の社寺建築』伊勢崎市　昭和58年
『佐波郡神社誌』群馬県神職会佐波郡支部　大正13年
『柴町神社本殿　天増寺山門　波志江の屋台　未指定物件調査報告書』伊勢崎市歴史的建造物調査委員会　平成16年

15　大雷神社〔たいらいじんじゃ〕

表15－１

神　社　名	大雷神社（たいらいじんじゃ）	所　在　地	伊勢崎市西久保町3-859
旧　社　格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　大雷神社
主　祭　神	大　雷　神（おおいかづちのみこと）	神　事	元旦祭（１/１）、春季例祭（４/５）、秋季例祭（10/５）
創立・沿革	平安時代の中頃、足利又太郎兼行が淵名荘を領有するに当たり、社殿を造営したことに始まると伝える（雷電宮）。元亀２年(1571)、市場から現在の西久保に遷座したという（『赤堀村誌』『伊勢崎佐波の神社誌』）。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図15－１、写15－１）

国道50号西久保交差点より南に400m、主要地方道伊勢崎大間々線沿いの東側に位置する。道路沿い

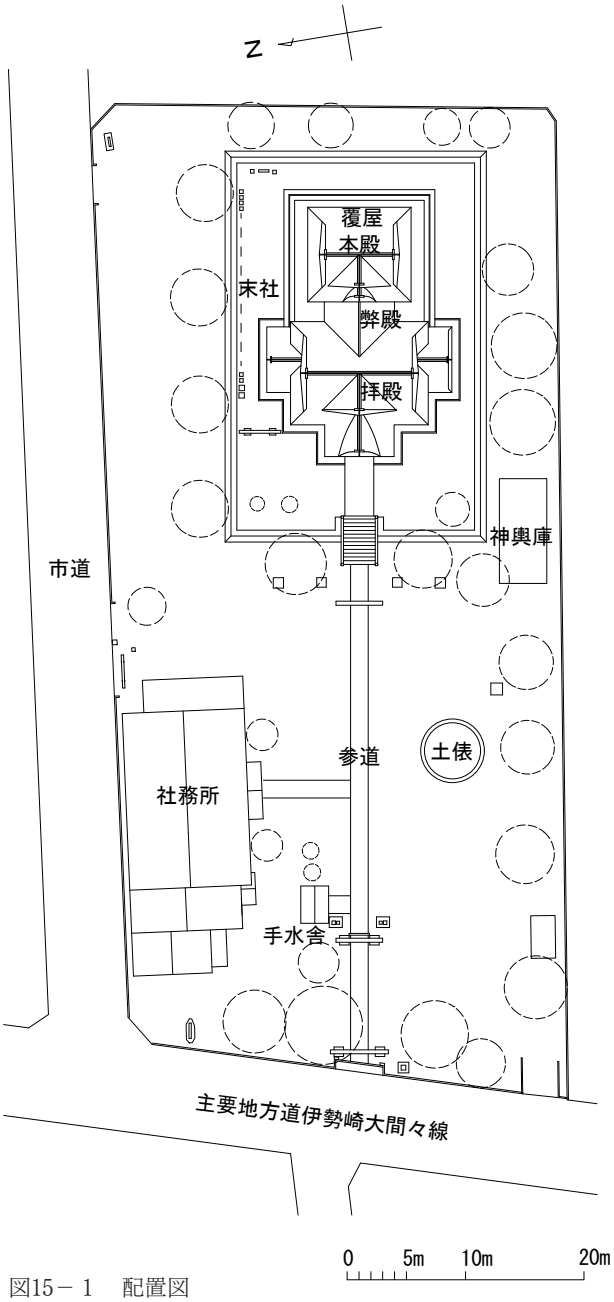


図15－１　配置図

写15－１　境内全景

入口を東に入ると１の鳥居、２の鳥居、少し離れて３の鳥居かあり、正面に人の背丈程の石垣の上に社殿が西面して建つ。２の鳥居先の左手に手水舎、社務所、右手に土俵を配する。入口左手には松陰先生の碑があり、樹木は敷地周囲に点在している。また社殿北側石積上にはたくさんの末社石宮が立ち並ぶ。

由来および沿革

平安時代の中頃、藤原秀郷５世の孫、鎮守府将軍頼行の弟の足利又太郎兼行が淵名荘を領有するに当たり、社殿を造営し鎮座式を行ったのに始まると伝える（雷電宮）。後に淵名氏が滅亡し由良氏の領地となり、元弘３年(1333)新田義貞が鎌倉幕府追討の挙兵の際、当社に戦勝を祈願したと伝える。さらに元亀２年(1571)領主の崇敬篤く、市場に鎮座していた当社を現在の西久保に遷座した。

本殿（ほんでん）（図15－２、表15－２、写15－２～15－７）

『赤堀村誌(下)』では本殿の建造年代として「寛政10年(1798)12月領主加納氏、本殿・拝殿共に改築し、更に昭和５年(1930)に今の本殿様式に改築した。」とある。昭和３年(1927)の改築前の古写真に以前の拝殿（覆屋）が写り、内部に当本殿があった

ものと思われる。腰から胴、軒廻りまで嵌め尽くされた彫刻の数々や装飾性を見ると、江戸後期の神社建築の様相を伝えるが、極彩色が組物以外のすべての部材に施されており、素木造が流行する前の江戸後期の建築として、その建築様式から、18世紀後期の建築と推定する。棟札等の古資料が無く工匠は不明である。なお社殿は昭和５年(1930)に現在の形式(本殿覆屋形式）に改築している。

建物は一間社流造柿葺、正面に向拝（庇）を延ばし軒唐破風を付ける。木製亀腹の上に土台を廻し丸柱を立て、各長押、頭貫を渡して軸部とする。組物

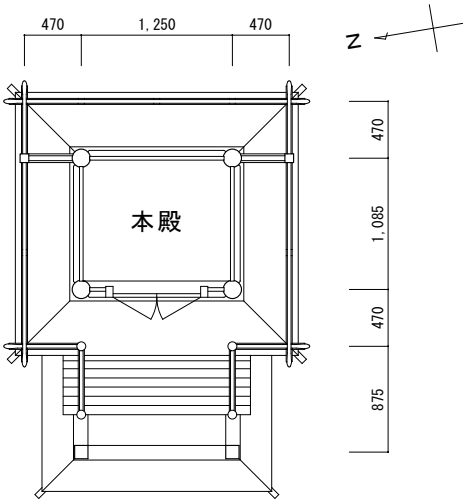


図15－２　平面図(本殿)

表15－２　本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社流造、向拝１間軒唐破風付、柿葺、正面１間(1.25m)、側面１間(1.08m)
工匠	不明	基礎	木製亀腹
軸部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]三手先・尾垂木　[腰組]拳鼻付三手先 [向拝]連三斗出組複層変形、手挟
中備	[身舎]嵌込彫刻　[向拝]嵌込彫刻	軒	[正面]二軒打越繁垂木、板支輪(彫刻)２段 [背面]二軒繁垂木
妻飾	二重虹梁(出組)大瓶束笈形付、蕪懸魚	柱間装置	[正面]中央両開桟唐戸、両脇板壁　[側背面]板壁
縁・高欄・脇障子	四方榑縁跳高欄付、登高欄擬宝珠付、脇障子(彫刻)、浜縁拭板、浜床拭板	床	畳敷
天井	鏡天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	朱・黒漆塗(軸部材)、素木(組物)、極彩色(木鼻、軒支輪、彫刻、虹梁浮彫彫刻絵様)	飾金物等	[身舎]長押出隅、破風板拝、破風尻、高欄、桟唐戸　[向拝]破風板拝、破風尻
絵画	本殿鏡天井(龍墨絵)	材質	欅
彫刻	[身舎]腰羽目(雲水、獅子と牡丹)、腰持送(波と花籠彫)、腰支輪(波とモミジ)、胴羽目(中国故事)、脇障子(松に鷹)、中備(松に鳥、波に鳥、雲に鳥)、軒支輪(雲水、花)、木鼻・組物木鼻(獅子、像、蜃、波)　[向拝]水引虹梁・丸桁(唐草絵様)、木鼻(正面獅子、側面獏)、中備(龍)、丸桁上(神獣不明)、兎毛通(鳳凰)		

写15－２　正側面腰上

写15－３　正側面腰下

写15－４　向拝正面

写15－５　身写正面

写15－６　東面妻飾

写15－７　北面胴羽目

は三手先で、外側丸桁と通肘木間、内側通肘木間の２か所に彫刻板支輪を入れ、その中央小天井は板張りとする。頭貫および組物に付く木鼻・尾垂木・隅尾垂木、また腰組を受ける持送は、霊獣等の丸彫とし、小振りで丸みのある彫刻で全てが極彩色で彩られる。向拝は正面に庇を延ばし、海老虹梁で身舎と繋ぐ。ほぼ全ての軸部（柱、虹梁、丸梁、土台、各長押、頭貫、棟木等）および縁廻り材に地紋彫が施され（朱・黒漆塗）、さらに腰羽目、胴羽目、妻飾部の全てに厚肉で極彩色の透彫彫刻を嵌め込み、目を見張る造りとなっている。各組物のみを木地留塗りとする。

まとめ

その創立は平安時代中期まで遡り、時の領主が雷除けや農耕神として雷電宮を祀り、その後も領主の篤い信仰により守られてきた古社である。そして何よりもその装飾性の高さが目を惹く。軸部を構成するほぼ全ての直線材には、網代や紗綾紋、組亀甲など、さらに身舎丸柱にはグリ紋の地紋彫が施される。また腰から胴、軒廻りに多くの彫刻が嵌め込まれ、その全てが極彩色で彩られる。彫刻の細やかさだけでなく、彩色も手が込み、古くから覆屋で守られ良くその色味を残す。建造年代のさらなる究明を含め、江戸後期の当地における神社建築の装飾性の高まりや変遷を探る上で貴重な建物である。

（栗原昭矩）

【参考文献】

『赤堀村誌(下)』赤堀村誌編纂委員会　昭和53年
『上野国神社明細帳17』群馬県文化事業振興会　平成20年
『伊勢崎佐波の神社誌』群馬県神社庁伊勢崎佐波支部　令和２年

19　(平塚)赤城神社〔(ひらづか)あかぎじんじゃ〕

表19－1

神　社　名	赤城神社（あかぎじんじゃ）	所　在　地	伊勢崎市境平塚1206-2
旧　社　格	村社	所有者・管理者	氏子
主　祭　神	大己貴命（おおなむちのみこと）、豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）	神　　事	お川入れ神事(７/７)
創立・沿革	創立は、永禄13年(1570)８月15日、当地を領した新田氏の遺臣渋川隼人が赤城山大洞の赤城神社の御分霊を勧進し、産土神として崇敬したのに始まる。大正２年４月、字明神の地より現在地に遷座とある(『伊勢崎佐波の神社誌』)。村には、新田氏の家臣渋沢氏が氏神として奉祀した時期は鎌倉時代末(1185～1333)、また室町時代(1366～1392)に赤城山頂の赤城神社に祈念し、分霊を平塚に勧進したと伝わる。		
文化財指定	本殿(市重文　昭和42年２月)		

位置・配置（図19－1、写19－1）

伊勢崎市の南に位置し、周囲は平坦な耕地が広がる。東、北に道路があり、東道路の南は「銅街道」である。境内は南北に長い。南の駐車場から鳥居（赤城神社）をくぐり北に進む、正面に拝殿、幣殿、本殿と配す。西に社務所、倉庫、大杉社神輿殿、石宮が並び、北に緑地と鳥居（大杉神社）、東に稲荷社を配す。

もとは南方の字明神に位置したが、明治43年(1910)の利根川大洪水により冠水大被害を受け、大正初年の利根川改修工事時に現所在地に移る。

由来および沿革

永禄13年(1570)８月15日、当地を領した新田氏の遺臣渋川隼人が赤城山大洞の赤城神社の御分霊を勧進し、産土神として崇敬したのに始まる、と『伊勢崎佐波の神社誌』に記載あるが、村に新田氏の家臣渋沢氏が氏神として奉祀した時期は鎌倉時代末、また、室町時代に赤城山頂の赤城神社に祈念し、分霊を平塚に勧進したと伝わる。

写19－1　境内全景

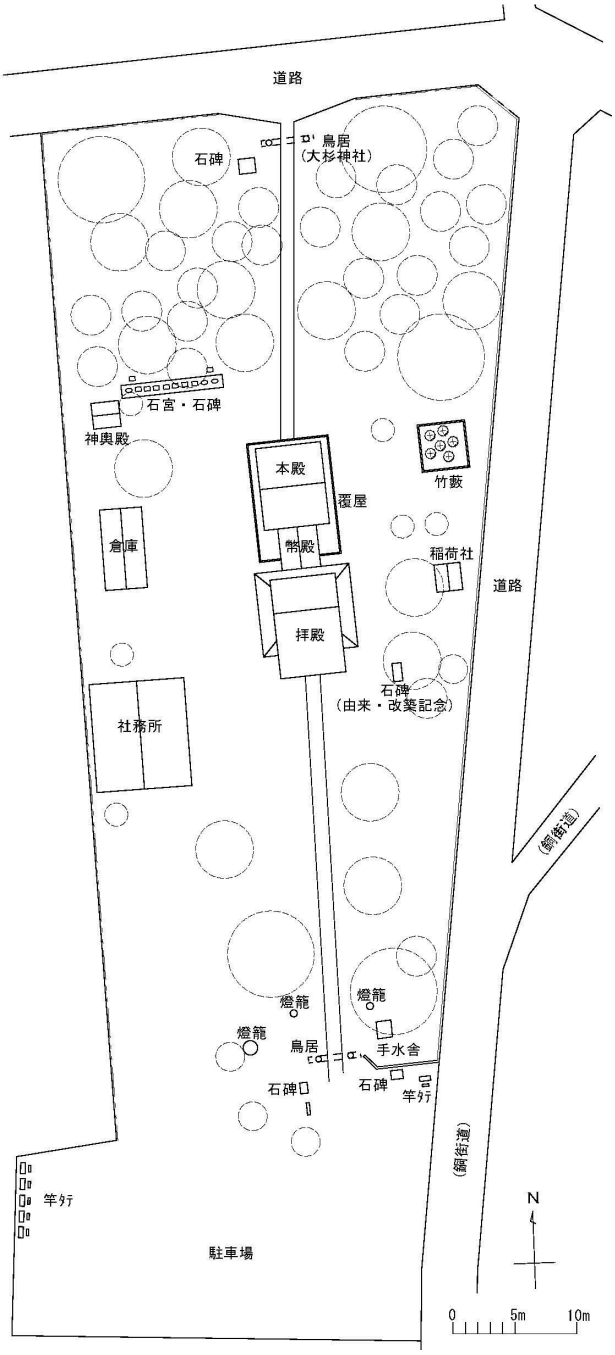


図19－1　配置図

本殿（ほんでん）（図19－２、表19－２、写19－２～19－７）

本殿の棟札は不明だが、本殿右高欄の擬宝珠に「永禄12巳年(1569)再建立、寛文４辰年(1664)中興、再建立嘉永６丑年(1853)９月吉日」との刻銘より判断する。工匠は弥勒寺音次郎・音八と村に伝わる。

正面１間、側面１間、向拝１間付、流造で棟に一対の置千木と、５本の竪魚木が置かれる。腰の組物は持送の上に二手先あることにより大床が広い。組物は三手先、妻飾りは二重虹梁と建物の背も高く、屋根も軒の出が深く大きい。彫刻が随所にみられる。妻部の笈形は緻密な波、下の二重虹梁の虹梁間は獅子、組物部に獅子の頭部を配している。虹梁は浮彫で、その下の組物間には透彫の板支輪と升がある。木鼻間にも透彫の飛龍が舞う。側面・背面の壁３面と腰組に厚肉彫りの彫刻が嵌られ、腰持送の

表19－２　本殿

建造年代／根拠	嘉永６年(1853)９月／刻銘(本殿右、高欄の擬宝珠)	構造・形式	一間社流造(1.41m)、側面１間(1.50m)、向拝１間、銅板葺
工匠	[大工・彫物]弥勒寺音次郎(父)・音八(子)(村伝)	基礎	基壇、切石亀腹
軸部	[身舎]丸柱、長押、土台　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎外部]三手先　[腰組]持送の上二手先 [浜床下]出組
中備	[身舎]嵌込彫刻　[向拝]彫刻	軒	二軒繁垂木、板支輪
妻飾	二重虹梁大瓶束、笈形	柱間装置	折戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄付、脇障子	床	拭板張
天井	棹縁	須弥壇・厨子・宮殿	厨子
塗装	素木、朱色(木鼻の口内部、正面板支輪龍)	飾金物等	破風板、尾垂木、垂木、腰・切目・内法長押、脇障子、扉、高欄(擬宝珠・架木・平桁・地覆)、切目縁、隅木扠首、階、浜床、土台、地覆
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎外部]柱(地紋彫)、腰・切目・内法長押(地紋彫)、懸魚(三ツ花)、桁隠懸魚(鳥)、笈形(波)、妻虹梁上(波・花)下(波・鳥)、中備上(獅子・牡丹)、三手先拳鼻(牡丹)、支輪上(飛龍)下(鳥)、中備下(波・飛龍)、木鼻(獅子)、壁西面(天・岩戸)、背面(高砂)、東面(三韓征伐)、腰二手先拳鼻(獅子)、持送(龍、波・鳥)、腰組上段東側右・(横笛鼓)、左・(鬼だぞう)。階下浜床上西南東共に(波)、階と腰組間西(松・人・鯉・波・地紋)、東(松・人・亀・波・地紋)、浜床下出組拳鼻(獅子)　[向拝]柱(地紋彫)、水引虹梁上部(八方睨みの龍)、水引虹梁(菊・波浮彫)、海老虹梁外(梅浮彫)、内(蔦刻線彫)、手挟(波・牡丹)、木鼻(獅子、獏)。 以下の彫刻欠損。彫刻の名は『平塚赤城神社社誌』より。脇障子西(赤壁高士舟遊)、東(虎渓三笑)。腰組上段西側右(碁打)、左(弾琴)、北側右(伏せた竹籠)、左(唐子闘鶏)。腰組下段西側右(笹・虎)、左(脱走する兎)、北側右左共に(牡丹・唐獅子)、東側右(雲竜)、左(一角獣)。階下三角部西(不明)、東(上部に松、下部不明)		

写19－２　全景

写19－３　背面

写19－４　向拝

写19－５　妻飾

写19－６　組物

写19－７　腰組

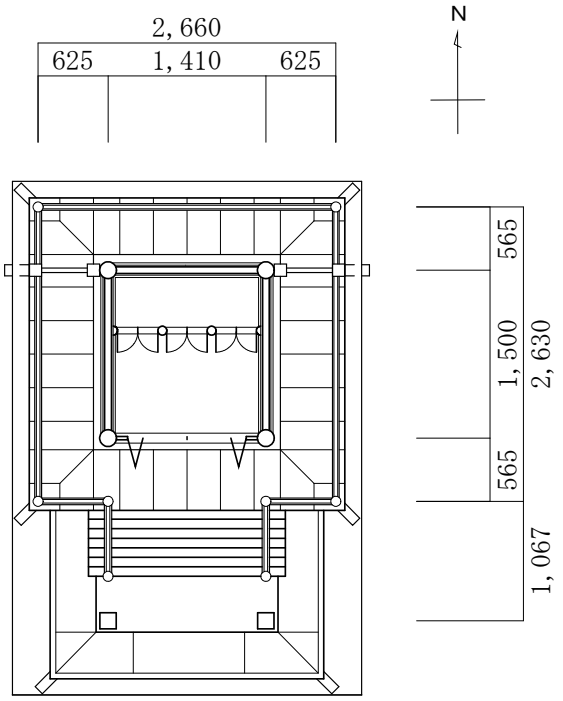


図19－2　平面図(本殿)

龍・波は丸彫。丸柱、向拝柱、脇障子の枠、腰・切目・内法長押、土台、地覆には地紋彫が施されている。浜床は鋼板で覆われる。屋根や正面唐戸に新田岩松氏の紋章と同じ中黒が用いられる。

まとめ

本殿の規模は小ぶりだが、妻の二重虹梁間は獅子の彫刻で、通常組物が多い角部を獅子の頭部で支える。壁や腰の嵌込彫刻、腰持送の丸彫の龍・波などの精緻な彫刻が本殿全体に配され、細部まで造り込まれている。大工、彫物師は弥勒寺音次郎・音八と村に伝わる。音次郎・音八は細谷（太田市）の冠稲荷聖天宮の造営に携わる。また太田市世良田の総持寺総門の棟梁は弥勒寺と伝わる。晩年の音次郎は伊勢崎神社の修造に関与しており、音八は彫刻を業とし常陸の笠間稲荷本殿でみられる。

南鳥居は「赤城神社」であるが、北鳥居は「大杉神社」の表記があり興味深い。大杉神社の合祀は大正４年(1915)７月で、境内には「大杉社」の神輿殿がある。大杉神社は疫病を防ぐと共に、水運業者や地域を水難から守る神として信仰されてきた。

「お川入れ神事」は御神体（赤城小沼を神格化した本地仏虚空菩薩の懸け仏）を利根川で洗い清め、無病息災を祈った神事である。当地は江戸時代、平塚河岸があり水運業が盛んであり、また水害に見舞われることが多かった特性があらわれている。境内の稲荷社は、小林家の氏神で社宮司稲荷である。耳病に御利益があり、お礼参りには穴のあいた石を奉斉する。

（伊藤美保子）

【参考文献】

『平塚赤城神社社誌』平塚赤城神社氏子総代　平成10年
『伊勢崎佐波の神社誌』群馬県神職会佐波郡支部　大正13年
『境風土記』しの木弘明　昭和44年
『上野国神社明細帳16　新田郡』群馬県文化事業振興会　平成19年

20　大國神社〔おおくにじんじゃ〕

表20－1

神　社　名	大國神社（おおくにじんじゃ）	所　在　地	伊勢崎市境下淵名2827
旧　社　格	郷社	所有者・管理者	宗教法人　大國神社
主　祭　神	大國主命（おおくにぬしのみこと）	神　事	春祭(小祭　4/3)、夏祭(中祭　境町ふれあい祭の日)、秋祭・下淵名の獅子舞(大祭　10月最終日曜日)
創立・沿革	今より二千年ほど前、時の天皇により当地に大国主命を奉齋、神護慶雲元年(767)、天皇の勅を奉じて当地に来た従五位上佐位采女が、大国主命を国の造神と号し、渕名の荘36郷の総鎮守として当社の社殿を修造した(「大國神社縁起」)。延喜式神名帳に「上野国大國神社」、上野国神名帳に「従一位大國神社」と記され、古い歴史を伝えている。		
文化財指定	大国神社の石幢(御手洗の石燈籠と呼ばれる、延徳２年(1490年)の銘がある、市重文　昭和42年２月)、下淵名の獅子舞(市重無民　平成18年６月)		

位置・配置（図20－１、写20－１）

伊勢崎の東、国道17号と県道292号線の交差するところに位置する。東西に長い桜並木の参道を西に進み鳥居を抜けると正面に拝殿がやや南に振れて東面し、拝殿奥に幣殿、本殿と続く。北に社務所、浅間神社、八坂神社が並び、南に天満宮、石畳の参道に面して手水舎とその後に石幢を置く。境内地は多くの樹木で覆われ、長い歴史を伝えている。またかつて境内地東北方には、大国主命が手を洗ったと伝わる御手洗池があり、その地に御手洗神社があったが、明治40年(1907)当社に合祀されている。

由来および沿革

大國神社はその名が示す通り大國主命（おおくにぬしのみこと）を祭神とし、延喜式神名帳（えんぎしきじんみょうちょう）に「上野国大國神社」、上野国神名帳（こうずけのくにじんみょうちょう）に「従一位大國神社」と記載される古社である。「大國神社縁起」によると、今から二千年ほど前、大干魃による凶作を憂う天皇が、百済国の車臨というものを派遣、この地で豊かな水をたたえる淵瀬で手を洗う白髪の老人に会い、降雨の願いをすると、目の前がたちまち大きな水淵（御手洗池）となったという。それよりこの地を淵名と呼んだ。そしてこの老人が大國主命であった。これを奇瑞に感じ、天皇が当地に大國主命を勧請したという。さらに８世紀の中頃、天皇の勅を奉じて当地に来た従五

写20－１　境内全景

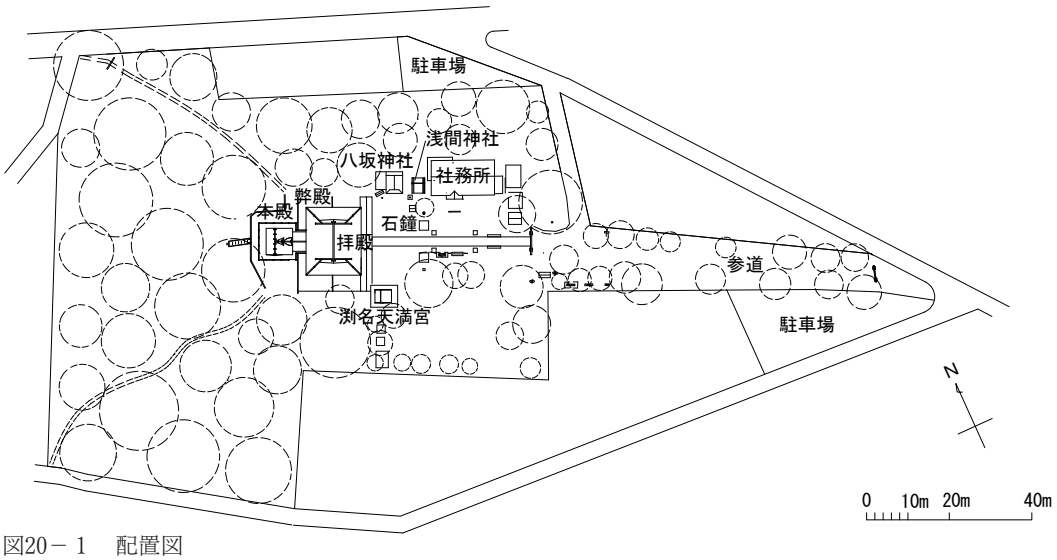


図20－１　配置図

位上佐位采女が、大國主命を国の造神とし、渕名の荘36郷の総鎮守として社殿を修造したと伝える。

当社では中祭としての春祭、小祭としての夏祭、そして10月には大祭としての秋祭が行われるが、秋祭には下淵名の獅子舞が奉納される。当獅子舞は平成８年に市指定重要無形民俗文化財となっている。また境内には延徳２年(1490)の銘のある石幢があり、昭和42年に市指定重要文化財となっている。

本殿（図20－２、表20－２、写20－２～20－７）

現在の本殿の建造年代を明らかにする資料は確認できていないが社伝では寛政５年(1793)、また『境風土記』では寛政年間(1789～1801)としている。ここでは土台の設置、四方に廻された榑縁、彫刻板支輪の採用、レリーフ化が進んだ虹梁唐草絵様、向拝柱の地紋彫、内法長押上部組物間に連なる小斗と装飾化の進展、内法長押下部の簡素な設え等から18世紀後期の建築と推定するが、今後の棟札等の発見を待ちたい。また神社資料では武州妻沼住平内大隅神忌部藤原正義が棟梁、武州熊谷住玉井の小林済小林源八正信が彫刻師頭とし、『境風土記』では、下淵名の名工弥勒寺音次郎の養父小林新七を大工棟梁と記すが、その根拠資料は示していない。

建物は三間社流造平入銅板瓦棒葺、側面２間で正面に庇を出し向拝とし、軒唐破風、千鳥破風を付ける。棟には置千木２対と勝男木５本を載せる。銅板瓦棒葺は昭和５年(1930)の改修によるもので、それ以前は柿葺であった。外部は腰組組物および身舎内

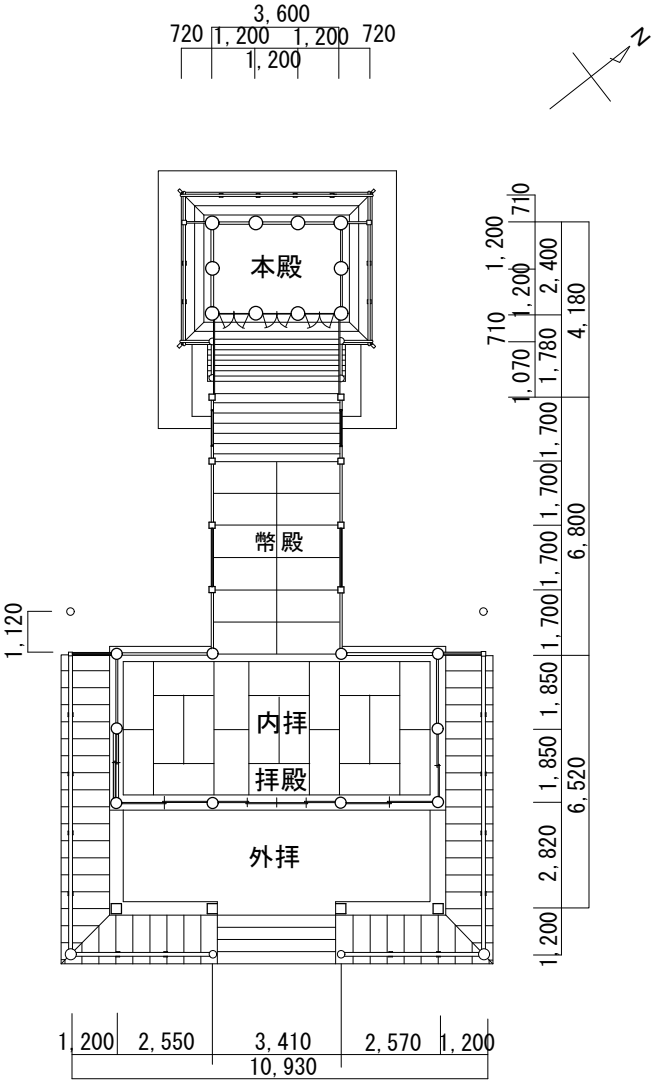


図20－２　平面図(社殿)

表20－２　本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	三間社流造、千鳥破風付、向拝１間軒唐破風付、銅板瓦棒葺、正面３間(3.60m)、側面２間(2.40m)
工匠	不明	基礎	石製基壇の上石製亀腹
軸部	[身舎]土台、丸柱、切目・腰・内法長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[身舎]三手先・尾垂木　[腰組]柱建・拳鼻付出組　[向拝]連三斗出組積上変形、手挟
中備	なし	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)１段
妻飾	二重虹梁大瓶束笈形(水紋)付、三ツ花懸魚	柱間装置	正面中央間：両開桟唐戸、両脇間：両開板戸、側背面：板壁
縁・高欄・脇障子	四方榑縁跳高欄付、登高欄付、脇障子(彫刻)	床	不明
天井	不明	須弥壇・厨子・宮殿	不明
塗装	素木、極彩色(彫刻板支輪、手挟、向拝木鼻)、朱塗(縁、高欄、階)	飾金物等	[身舎]破風板拝、卍紋、破風尻、裏甲出隅、垂木口　[向拝]破風板拝、卍紋、破風尻、
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎]妻虹梁(唐草絵様)、懸魚(三花、雲)、笈形付大瓶束(水紋)、支輪(波・菊・飛龍)、腰組(波・菊)、木鼻(獅子・牡丹丸彫)、尾垂木(蜃・龍・像)、脇障子(昭和32年作)、組物鼻(像・鳳凰)　[向拝]水引虹梁(唐草絵様)、柱(地紋彫)、海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子・獏)、手挟(牡丹丸彫)、兎毛通(鳳凰)		

写20－２　全景

写20－３　側面・背面

写20－４　向拝正面

写20－５　向側面

写20－６　身舎正面組物

写20－７　妻飾

法長押より上部の木鼻、虹梁、彫刻板支輪、大瓶束等に彫刻が施され、彫刻板支輪および笈形付大瓶束は極彩色と、装飾化が進む本殿建築の変遷を伝える。

組物は身舎外部は尾垂木付三手先で、外側丸桁通肘木間に彫刻板支輪を入れ、内側通肘木間は板張小天井とする。向拝は連三斗出組複層である。

彫刻は向拝軒唐破風兎毛通の鳳凰、水引虹梁木鼻の獅子と獏、手挟の籠彫菊花、身舎木鼻の獅子と牡丹、尾垂木・隅尾垂木の蜃と龍と象、組物木鼻の象と獏と鳳凰、身舎彫刻板支輪の飛龍と波、妻飾彫刻板支輪の菊と波、笈形付大瓶束の水紋と、内法から上部は多くの彫刻で埋められる。

拝殿（図20－３、表20－３、写20－８～20－13）

本殿同様に、拝殿の建造年代を示す資料は確認できていないが、社伝では文化元年(1804)、また『境風土記』では天保年間(1830～1844)の建築としている。正面柱の手の込んだ地紋彫、正面虹梁のレリーフ化が進んだ浮彫の絵様、正面頭貫両端側面から正面側を向く獅子頭、立ちが低く脚を張り彫刻が大きく脚より浮き出した蟇股、厚肉彫の彫刻板支輪等の装飾性の高い設えより、江戸末期の建築と推定する。

建物は正面３間、側面３間、入母屋造平入銅瓦葺である。昭和62年(1987)にそれまでの瓦葺から銅瓦に葺替えている。平面は手前１間を吹放しの外拝、

表20－３　拝殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	入母屋造、平入、銅瓦葺、正面３間(8.53m)、側面３間(6.52m)
工匠	不明	基礎	自然石礎石
軸部	[身舎]丸柱、切目長押、虹梁(差鴨居)、頭貫、台輪　[外拝]角柱	組物	[身舎外部]拳鼻付出組、尾垂木　[外拝]拳鼻付出組　[内拝]出三斗
中備	[身舎外部]本蟇股　[外拝]本蟇股、大瓶束笈形付　[内拝]蓑腰撥束	軒	二軒繁垂木
妻飾	虹梁大瓶束笈形付、拳鼻付複層出組、板支輪(彫刻)、蕪懸魚	柱間装置	[正面中央]アルミ引違戸　[正面脇]蔀戸　[側面]舞良戸、板壁　[背面]板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子(板)	床	[外拝]拭板　[内拝]畳敷
天井	[外拝]板張　[内拝]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	素木、極彩色(板支輪(彫刻))、黒漆(天井桁)	飾金物等	垂木木口
絵画	なし	材質	欅
彫刻	[身舎外部]虹梁(松樹、唐草絵様)、本蟇股(鳥・植物・波)、板支輪(彫刻：波・花)、木鼻(獅子、牡丹、拳)　[外拝]虹梁(飛龍・鳥・亀・波)、本蟇股(鳥・植物・波)、板支輪(彫刻：波・花)、手肘木(飛龍・鳥・波)、角柱(地紋彫)		

写20－８　正面全景

写20－９　正側面

写20－10　正面組物

写20－11　外拝内部組物

写20－12　内拝外部正面

写20－13　内拝内部組物

奥２間を内拝（ないはい）とし、外拝の奥行が広く多くの参拝者を受け入れていた様子を伝える。

柱は石場立てとし、外拝を角柱、内拝を丸柱とする。足固、地貫、虹梁型差鴨居、頭貫、台輪で軸部を構成する。外部組物は拳鼻（象様）付出組で隅尾垂木を付ける。内部組物は、外拝が外部と同じ拳鼻付出組、内拝が出三斗である。頭貫木鼻は獅子と牡丹で極彩色の彫刻板支輪を入れる。

彫刻は外拝正面虹梁の浮彫の飛龍、鳥、亀と波、虹梁端部下の手肘木の籠彫の飛龍、鳥と波、木鼻の獅子と牡丹、本蟇股の鳥、植物と波、彫刻板支輪の花と波（極彩色）、そして内部繋虹梁中央大瓶束下部北面には人面模様の力股、内拝正面虹梁の松樹とレリーフ化が進んだ絵様、そして正面角柱の各種地紋彫等で飾る。全体的に立ちが高く大きな部材で構成された設えは、力強く迫力がある。

まとめ

延喜式内上野十二社の五之宮に記され、大国主命にまつわる古い謂われを持つ当社は、当地における古い信仰の歴史を伝えている。本殿は18世紀後期の建築、拝殿は19世紀中期から幕末の建築と推定するが、装飾化が進む趨勢を良く伝えているとともに、手の込んだ彫刻類の設えとしての評価と合わせ、時代的特性、地域的特性を知る上でも貴重な社殿建築のひとつである。なお拝殿に関しては、下淵名出身の大工棟梁、彫工としても高名な名工弥勒寺音次郎によると、長く言い伝えられている。

（栗原昭矩）

【参考文献】

『境町誌　第三巻　歴史編上』境町　平成８年
『境風土記』しの木弘明　昭和44年